

島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想

＝出雲国風土記の自然と歴史に出会う大地＝

日本ジオパークネットワーク加盟申請書

平成 29 年 4 月

(平成 29 年 11 月 一部修正)

島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会

目次

第1章 申請地域について	1
1-1 申請地域の名称、テーマ、背景と考え方	1
(1) 島根半島・宍道湖中海及び南部丘陵山地の地質地形学的背景（執筆：学術・研究部会）	1
(2) 自然と歴史文化が融合したユニークな大地（執筆：学術・研究部会）	2
(3) 環日本海域の古代の人々の交流（執筆：学術・研究部会）	2
(4) 『出雲国風土記』と地形地質学が織りなすジオパーク構想（執筆：学術・研究部会）	3
1-2 地理的位置（執筆：学術・研究部会）	3
1-3 地理的概要（執筆：学術・研究部会）	3
1-3-1 地勢、気候、生態系など	4
(1) 地形・気候（執筆：学術・研究部会）	4
(2) 生物・生態系（執筆：学術・研究部会）	5
(3) 自然公園（執筆：学術・研究部会）	6
(4) 天然記念物・名勝（執筆：学術・研究部会）	6
1-3-2 歴史・民俗的背景など（執筆：学術・研究部会）	6
1-3-3 社会、経済、人口、交通など	7
(1) 人口・産業（執筆：事務局）	7
(2) 交通（執筆：事務局）	8
(3) 施設（執筆：事務局）	8
1-4 組織、運営・事業計画、予算	9
(1) 運営組織（執筆：事務局）	9
(2) 学術的サポート（執筆：事務局）	10
(3) ビジターセンター候補地（執筆：事務局）	10
(4) 事業計画（執筆：事務局）	11
(5) 予算（執筆：事務局）	11
第2章 地質・地形遺産	12
2-1 申請地域の地質・地形の概要（執筆：学術・研究部会）	12
2-2 主要な「地質・地形サイト」の解説とその価値（執筆：学術・研究部会）	15
2-3 主要な「地質・地形以外のサイト」の解説とその価値（執筆：学術・研究部会）	15
2-4 各サイトの関連性と申請地域のテーマ（執筆：学術・研究部会）	29
第3章 地質・地形遺産の保全	30
(1) 制度的枠組み（執筆：保全・教育部会）	30
(2) 仕組みの構築に向けて（執筆：保全・教育部会）	31
(3) 活動事例〈できることから行動しよう〉	31

第4章 教育活動、研究支援活動、防災・安全対策、普及啓発等の活動	32
4-1 教育・研究支援（執筆：保全・教育部会）	32
4-2 防災（執筆：保全・教育部会）	32
4-3 安全対策（執筆：保全・教育部会）	34
4-4 ガイド養成（執筆：保全・教育部会）	34
4-5 普及活動	36
(1) 講演会・シンポジウム・見学会等の開催（執筆：観光・広報部会）	36
(2) 解説板の整備（執筆：観光・広報部会）	36
(3) ロゴマーク作成、普及グッズの作成・配布（執筆：観光・広報部会）	37
(4) ガイドマップ・パンフレット（執筆：観光・広報部会）	37
(5) その他の普及活動（執筆：観光・広報部会）	38
第5章 地域の持続可能な発展	40
5-1 地域経済活動	40
(1) 本構想エリアを取り巻く動き（執筆：観光・広報部会）	40
(2) 長期滞在をうながす仕組みづくり（執筆：観光・広報部会）	41
(3) 地域が継続的に稼げる枠組みの構築（執筆：観光・広報部会）	42
5-2 ジオツーリズムの可能性	42
(1) 実績、課題（執筆：観光・広報部会）	42
(2) 基本的な考え方、方針、展望（執筆：観光・広報部会）	43
5-3 地域住民の活動（執筆：保全・教育部会）	47
第6章 日本ジオパークに立候補する背景と理由（執筆：事務局）	48

※図や写真等で出典の記載がないものは、島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会が作成・撮影したものです。

(執筆詳細)

※平成 29 年 3 月現在

部会	選出分野	氏名	所属
	運営委員長	● 小林 祥泰	国立大学法人島根大学
学術・研究部会	ジオ環境研究	◎ 野村 律夫	国立大学法人島根大学くにびきジオパーク・プロジェクトセンター
		高尾 彬	島根県地学会
		井上 雅仁	島根県立三瓶自然館サヒメル
		佐藤 仁志	公益財団法人 日本野鳥の会
		内田 律雄	島根県埋蔵文化財調査センター
	歴史・神話・文化	川谷 誠一	出雲大社
		飯塚 大幸	一畑薬師
		◎ 平野 芳英	荒神谷博物館
		的野 克之	島根県立古代出雲歴史博物館
		川島 芙美子	山陰万葉を歩く会
		錦田 剛志	万九千神社
		小泉 凡	公立大学法人島根県立大学
		秦 和憲	長浜神社
	観光・広報部会	旅行・交通	和田 昇司
木内 吾平			
安井 和雅			
マスメディア・圏域メディア		山根 収	山陰中央テレビジョン放送株式会社
		木村 靖	NHK 松江放送局
		山根 貴司	株式会社山陰放送
		藤井 満弘	株式会社山陰中央新報社
		山田 勝美	山陰ケーブルビジョン株式会社
		安里 隆司	出雲ケーブルビジョン株式会社
		菊地 恵介	株式会社島根日日新聞
商工観光		松浦 俊彦	松江商工会議所
		糸原 直彦	出雲商工会議所
		坂本 倫光	平田商工会議所
		北垣 茂巳	一般社団法人松江観光協会
		○ 住吉 裕	一般社団法人松江観光協会美保関町支部
		小野 篤彦	一般社団法人出雲観光協会
農林水産業・食品関連		高木 賢一	島根県農業協同組合
		浅田 伸二	株式会社田部
		井上 裕司	
保全・教育部会		環境保全・防災	栢野 和則
	金崎 洋利		
	西尾 正博		国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所
	石飛 茂継		
	徳岡 隆夫		
	地域活動	浅田 純作	松江工業高等専門学校
		小川 英二	松江市民館連合会
		高橋 一夫	出雲市コミュニティセンター長会
		召古 裕士	NPO 法人日本エコビレッジ研究会
		門脇 和也	島根県自然観察指導員
		木幡 育夫	島根半島四十二浦巡り再発見研究会
		濱田 義治	ウミネコ生態調査専門調査員
		河野 美知	神社ガールズ研究会
		中野 雅行	加賀まるごと博物館
	ミュージアム連携	◎ 入月 俊明	国立大学法人島根大学ミュージアム
		○ 会下 和宏	国立大学法人島根大学ミュージアム
		○ 辻本 彰	国立大学法人島根大学教育学部
		古川 寛子	モニュメント・ミュージアム来待ストーン
	事務局	◎ 佐目 元昭	松江市政策部地域振興課
		福間 祐二	
石飛 幸治		出雲市総合政策部政策企画課	
荒木 真一			

●：全体の総括（観光・広報部会の総括兼務）、◎：各部会等の総括、○：各部会等の副総括

第1章 申請地域について

1-1 申請地域の名称、テーマ、背景と考え方

名称は「島根半島・^{しんじこ}宍道湖^{なかつま}中海ジオパーク (Shimane Peninsula and Shinjiko Nakaumi Estuary Geopark)」とし、「出雲国風土記の自然と歴史に出会う大地」を全体テーマに設定する。

島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想（以下「本構想」という。）では、地質・地形遺産を基盤とし、この地域における古代の様相を精密に記録した出雲国風土記を模範としながら、大地に根づき現在まで続く歴史文化を織り交ぜた視点でジオパークの魅力・価値を次の世代へ、そして世界へと伝えていく。

(1) 島根半島・宍道湖中海及び南部丘陵山地の地質地形学的背景

島根半島と南部丘陵山地に広がる地域には、主に約6,000～3,300万年前の古第三紀に形成された花崗岩類と約2,300～1,000万年前の新第三系中新統が発達する。両地域の間には国内最大の連結汽水湖である宍道湖と中海が分布する。

① 山陰地域を代表する地質層序と日本海形成史への学術的貢献

古くより宍道褶曲帯と呼ばれてきた島根半島の地質学的意義が、最近の日本列島を取りまく地質情報のなかで一層価値が高まっている。島根半島の中新統層序や産出化石が示す淡水成、汽水成、そして海成層への一連の変化は、日本海の拡大事変と関係すると考えられている。深海で起こった火山活動は広域にわたる熱水変質作用を伴い、黒鉱床を形成した本邦のグリーンタフ変動帯の西端を特徴づける。南部丘陵山地における大規模な不整合は、西南日本本州弧の時計回り回転やフィリピン海プレートの北北西移動の時期と重なる。また、島根半島の砂岩泥岩互層からなるタービダイト層や海底火山の噴出物は、山陰を代表する大規模な地質体として知られる。

南部丘陵山地である宍道湖南岸では、中期中新世の温暖期から冷温期へ移行する過程に形成された布志名層から動物化石が産出し、布志名動物群と呼ばれる。この地層を模式地として記載された新種の軟体動物化石は、現在までに16種を数える。

② 沖積平野の形成過程と宍道湖中海低地帯の特異性

この低地帯は、土砂供給元の中国山地のまさ（風化花崗岩）と大山・三瓶山の安山岩質火砕物、運搬者である斐伊川等の河川、そして河口の前面部に位置する器としての島根半島の三者が、平野と汽水湖の効果的な形成を導いた特異な発展過程を示す。塩分の異なる宍道湖と中海の湖水循環は、島根半島の東西約70kmにおよぶ地形に規制され、それぞれ特有な生態系を形成する。



出雲平野上空から宍道湖方面を望む

③ 人為的平野の形成と人々の暮らし

この地方特有の「たたら製鉄」による「かな流し」は人為的な平野形成の要因となった。斐伊川によって運搬された「かな流し」による花崗岩質粒子は、出雲平野の1/3を形成するまでとなり、日野川からの流出は弓ヶ浜半島を拡大させた。洪水時の流路を人為的に管理し平野の拡大に供した川違え（かわたがえ）は、斐伊川河口域の地形を特徴づける。平野の拡大は人々の生活の場として地域固有の文化を生んだ。築地松は、出雲平野の人々の生活と自然を語るうえで欠かせない日本を代表する景観となっている。

(2) 自然と歴史文化が融合したユニークな大地

『出雲国風土記』は、時の朝廷が各諸国へ向けて国の実情を報告するように命じた713年から、さらに20年もの歳月を経て733年に提出された。地名由来の伝承の他に、方位や計測距離を織り込んだ記述は、極めて詳細な現地調査に基づいていることが窺える。そして、驚くことに1,300年経った今でも出雲国の山河や神社は、『出雲国風土記』の往時を偲ぶことができる原風景として残っている。その『出雲国風土記』の意宇郡の冒頭に、「国引き神話」とも呼ばれる有名な詞章がある。

「八雲立つ出雲の国は、^{さぬの わかくに}狭布の菴国なるかも。^{はつくにちさ}初国小く作らせり。
^{かれ}故、^{くにこ}作り縫はな」から始まり、「『^{くにこ}国来、^{くにこ}国来』と引き来縫へる国は、
^{こづ}去豆の折絶よりして、^{やほしおきづき}八穂米支豆支（杵築）の御埼なり。かくて堅
^{かし}め立てし加志（杭）は、^{さひめ}石見国と出雲国との堺なる、名は佐比売山、
是なり。亦、^{その}持ち引ける綱は、^{その}菌の長浜、是なり。」（加藤義成『修訂出雲国風土記参究』から引用）と展開する。



『出雲国風土記』(日御碕神社本)
日御碕神社所蔵、島根県立古代
出雲歴史博物館写真提供

この詞章は、島根半島が天然の巨大な防壁となり、斐伊川水系の土砂を堰き止めて肥沃な平野を形成してきた歴史と、入り江や潟湖の形成が国土創生という観点で述べられている。いわゆる「国引きの詞章」は、花崗岩類を基盤とする中国山地、島根半島そして日本海へと俯瞰した大地の中で低地帯から半島へと広がる国土の耕作地の拡大を祝い、新羅や古志などとの環日本海交流が盛んな場所として土地を引く姿にたとえた。「河船のモソロモソロ（ゆっくり）に」と陸塊を綱で引く様子は、平野の拡大であり、島根半島を取り込んでいく自らの生活圏の拡大でもあった。国土創生の一大事業を詩歌風に語り尽くすこの詞章は、全国的にも、世界的にも、次代の人々に伝え継ぐべき価値をもっている。

(3) 環日本海域の古代の人々の交流

島根半島周辺の古代においては、宍道湖・中海及び「神門水海」のような潟湖（ラグーン）が分布していた。こうした地勢的特徴は、朝鮮半島・九州北部から北陸以北に及ぶ環日本海地域の交流拠点にもなった。

例えば、出雲地域における弥生遺跡からは、朝鮮半島に由来する鉄器・青銅器・土器が数多く出土している。古墳時代にも朝鮮半島の陶質土器が出土し、出雲西隣の石見東部沿岸の遺跡からは7世紀頃の新羅産印花文土器も見つかっている。358本の銅剣が出土した荒神谷遺跡における青銅器原料は、朝

鮮半島・中国華北地域から九州北部を經由してもたらされたものと考えられている。一方、韓国釜山市にある東來遺跡（古墳時代前期）からは日本の土器が出土している。この他、九州北部産の銅矛・弥生土器や北陸産ヒスイの出土などもこうした地域と古代出雲との文物交流の一端を示している。



荒神谷遺跡から出土した 358 本の銅剣
(古代出雲歴史博物館展示)



楽浪系の硯片が出土した田和山遺跡

(4) 『出雲国風土記』と地形地質学が織りなすジオパーク構想

『出雲国風土記』には、現在まで続く豊かな自然が余すところなく描かれ、その一つ一つが、今を生きる人々の暮らしにも宿っている。世界的に見ても歴史・神話と地形が一つになって存在し続けること自体が人類の遺産であると言える。

このような貴重な空間をタイムスリップして楽しみ、学んでもらおうというのが本構想である。海外の人も、国内の人も『出雲国風土記』を一読してからこの空間を巡ることで、より興味深い体験ができるものと考えている。その地質学的妙味は、まさに神の織りなす世界である。島根半島、宍道湖・中海低地帯に広がる出雲平野と古墳群、海食洞と黄泉の国、巨石に宿る神と断層などは、自然の造形を目前にして古代人と空間を共有できる大地の公園と言える。そして、歴史的にも考古学的にも自然科学的にも魅力に溢れており、日本を見つめ直す機会となることは間違いない。

1-2 地理的位置

本構想エリアである松江市及び出雲市は、日本列島西部にある中国地方の島根県東部に位置する。日本海に面し、総面積は 1,197.35 km²である。



島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想エリア図

1-3 地理的概要

本構想エリアは、その中心に宍道湖・中海を抱える風光明媚な地域である。宍道湖・中海はラムサール条約登録湿地の指定を受け、連結した湖沼面積では日本最大の汽水湖であり、冬になると水鳥も

多く飛来する。日本海に面した島根半島は、大山隠岐国立公園の指定を受けた美しいリアス式海岸と宍道湖北山山系で形成されている。北山山系は朝日山、枕木山、鼻高山、弥山などからなる 200～540 m の背稜山地であり、それほど高くない山頂が連続し、均整のとれた山並み景観である。出雲市内を流れる斐伊川は、かつて中国山地で盛んに行われていた「たたら製鉄」により土砂が流れ出し、その土砂が堆積することで出雲平野が発達した。



島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想地形図

本構想エリアは、その地形的な特徴により、以下のように大きく 3 つのエリアから構成される。

【島根半島エリア】

島根半島は標高 536.3 m の鼻高山を最高点とする山々がほぼ東西方向に連なる山地である。その山々は西部・中部・東部の 3 つの山地が雁行しており、地形学に従い、西部を弥山山地、中部を本宮山山地、東部を三坂山山地、美保関山地と呼ぶ。

出雲地方は冬の到来とともに北西の季節風に見舞われるが、島根半島は大きな屏風のような役割を果たすことで厳寒の季節から出雲の国を護り、古来より出雲文化の発展に大きく貢献してきた。

【出雲平野・宍道湖中海低地帯エリア】

中海（面積 85.68 km²、最大水深 8.4 m）・宍道湖（面積 79.25 km²、最大水深 6.4 m）は、西日本では大型の潟湖である。宍道湖と中海は同じ斐伊川水系に属し、連結潟湖を形成しており、一つの潟湖としてみると、霞ヶ浦に次ぐ大きさの潟湖となり、汽水湖としては日本最大の面積を有する。出雲平野は、斐伊川と神戸川が内湾を埋積してできた山陰最大の三角州平野で、東北東—南南西に約 20 km、幅は 4～5 km（最大幅 8 km）に達する。河川の長さや流域面積に比べて、平野が非常に大きい点に特徴がある。

【南部丘陵山地エリア】

出雲平野・宍道湖・中海の平地に沿う形で丘陵が西北東～西南西方向に連続している。宍道湖東部南岸の丘陵は泥岩層であり、この地域は貝類などの化石が多産するため、化石の研究者には全国的に知られた場所である。また、出雲市多伎町から斐川町にかけて、及び松江市の丘陵の南部地域は主に火山岩からなる地形で形成されている。

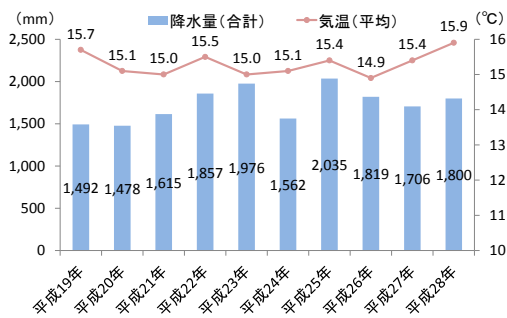
1-3-1 地勢、気候、生態系など

(1) 地形・気候

本構想エリアのうち、島根半島は主に 200～500 m の丘陵地となっている。また、宍道湖・中海は、日本海との平均水位差が数 cm～数 10 cm と小さく、出雲平野と同じく低地帯となっており、砂丘も観察することができる。

年平均気温は14.7℃であり、暖候期(4月～9月)には、地域的な差違はあまりないが、寒候期(10月～3月)は、日本海からの気流がもたらす影響で厳しい気象条件にある。

年間の降水量は1,744.6mmであり、平地より山間部が多くなっている。特に梅雨末期の前線の移動に伴い、集中豪雨を受けることが多い。冬は沿岸部の積雪は少ないものの、平野や山間部への積雪が見られる。風は、一般に山陽側よりも強く、冬季の出雲平野に吹く季節風が強いことから築地松のような独特な景観となっている。



降水量・気温変化(松江地方気象台)



出雲平野に吹く季節風から家を守る築地松

(2) 生物・生態系

ラムサール条約登録湿地である宍道湖・中海には、冬になると多様な水鳥が飛来する。特にコハクチョウが飛来する南限の地であることが知られている。また、西日本唯一のガン類の大規模集団渡来地でもあり、天然記念物のマガンも越冬している。『出雲国風土記』にも秋鹿郡や楯縫郡、出雲郡で白鳥やカモなどが生息していたことが記述されており、古代から渡り鳥の安息の地であったことがわかる。



飛来した水鳥(コハクチョウ)



宍道湖・中海の生態系 出典)出雲河川事務所

また、島根半島西端には、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている経島がある。中海と宍道湖は、連結した汽水湖であるが、塩分は違い、それぞれ異なる生態系が存在している。宍道湖の塩分は約0.3%でヤマトシジミの成育に適し漁獲量は日本一を誇る。

『出雲国風土記』によれば、出雲国の薬草は「於宇(附子)」も含めて61種も記載されている。これは播磨国の7種、常陸国の2種に比して圧倒的に多い。ちなみに、「古代出雲の医薬と鳥人」(間壁

葎子) によれば、意宇郡の「意宇」は猛毒の鳥兜の古代名の「於宇」と類似しており、高度な技術で鳥兜の減毒が行われた医薬の中心地であった可能性が指摘されている。



鳥兜の地上部



鳥兜の根茎
(生薬名: 附子)



こがねばな
黄金花の地上部



黄金花の根茎
(生薬名: 黄芩)

(3) 自然公園

1963年に島根半島の一部は大山隠岐国立公園に指定された。特徴的な地形・気候・生物・生態系の保全と適正な利用の推進に官民挙げて取り組んでいる。さらに、2016年には世界水準のナショナルパークとしてのブランド化を図る国立公園にも選定された。また、宍道湖北山県立自然公園、立久恵峡県立自然公園に指定されている地域もある。

(4) 天然記念物・名勝

本構想エリアのサイトに関連する天然記念物と名勝を以下に示す。

区分	名称	所在地	所有者・保持者 ()は管理団体
国特別天然記念物	大根島の熔岩隧道	松江市八束町	松江市ほか
国天然記念物	大根島第二熔岩隧道	松江市八束町	松江市ほか
	築島の岩脈	松江市島根町	松江市
	多古の七つ穴	松江市島根町	国(松江市)
	ふみしま 経島のウミネコ繁殖地	出雲市大社町	日御碕神社(出雲市)
名勝・国天然記念物	立久恵	出雲市乙立町	個人
	くげど 潜戸	松江市島根町	国(松江市)
県天然記念物	日本海岸におけるハマナス自生西限地	出雲市湖陵町	個人
市天然記念物	立久恵峡特殊植物群落	出雲市乙立町	個人
	命主社のムクノキの大樹	出雲市大社町	出雲大社
名勝	まくらぎさん 枕木山	松江市枕木町	華蔵寺(松江市)

1-3-2 歴史・民俗的背景など

神話の舞台である本構想エリアは、現代においても「古代から近世までの歴史を体感できる地域」である。本構想では、国宝の出雲大社、神魂神社や松江城、358本もの銅剣が発見された荒神谷遺跡などを、歴史・文化を伝えるサイトとして選定し、地質・地形サイトと組み合わせたツアーや学びの場を提供することで、その魅力を広く発信していく。



出雲大社



神魂神社



松江城



荒神谷遺跡

また、宍道湖の四方には神の山（カンナビ山）が存在する。「カンナビ」とは、「神の隠れこまれる」という意味で、「カンナビ山」は信仰の対象として古代人に祭られていた山のことを指す。『出雲国風土記』では、意宇郡の「神名槌野」、秋鹿郡と出雲郡の「神名火山」、楯縫郡の「神名槌山」の4か所あったとされる。このような違いから地域性が感じられるが、いずれも「入海（宍道湖）」を取り巻くように配置している。



出雲国のカンナビ山



大船山(楯縫郡:神名槌山)



朝日山(秋鹿郡:神名火山)



仏経山(出雲郡:神名火山)



茶臼山(意宇郡:神名槌野)

1-3-3 社会、経済、人口、交通など

(1) 人口・産業

松江市及び出雲市の人口・産業・雇用については以下のとおりである。

【松江市】

松江市の平成27年の人口は206,230人であり、平成22年と比べ2,383人減少している。

県庁所在地、また山陰最大の都市であり、鳥取・島根両県を統括する支店が多く置かれているほか、山陰地域で展開する企業の本社も多い。近年はIT産業にも力を入れており、松江発のプログラミング言語「Ruby」を核にした「Rubyのまち松江」としての新たな地域ブランドの創出に取り組んでいる。

また、国宝に指定されている松江城、神魂神社や、ユネスコ無形文化遺産に登録された佐陀神能など、先人から受け継がれてきた歴史文化が息づく京都市、奈良市に並ぶ「国際文化観光都市」である。

【出雲市】

出雲市の平成27年の人口は171,938人であり、平成22年と比べ453人増と県内唯一の増加となった。

出雲平野が広がり、県内でも農業生産力が高く、農業産出額は県全体の25%、果実だけ見れば58%を占める。空港に近い斐川地域には、大規模な電子部品をはじめとする製造業が集積しており、製造品出荷額は県全体の40%を占め、その原動力となる働き手として日系ブラジル人が急増している。

また、国宝である出雲大社は年間 600 万人が訪れる観光地であり、「神話のふるさと」、「縁結びの聖地」と言われている。

(2) 交通

本構想エリアへのアクセス方法として、鉄道では JR 山陰本線の松江駅、出雲市駅といった主要な駅がある。高速道路は中国横断自動車道尾道松江線（愛称：中国やまなみ街道）が開通しているほか、中国横断自動車道岡山米子線からもアクセスできる。また、大都市圏や隠岐を結ぶ出雲縁結び空港があり、松江市に隣接する境港市には、国際定期便が就航する米子鬼太郎空港（境港市・米子市に跨る）や環日本海国際フェリーが就航する境港がある。

(3) 施設

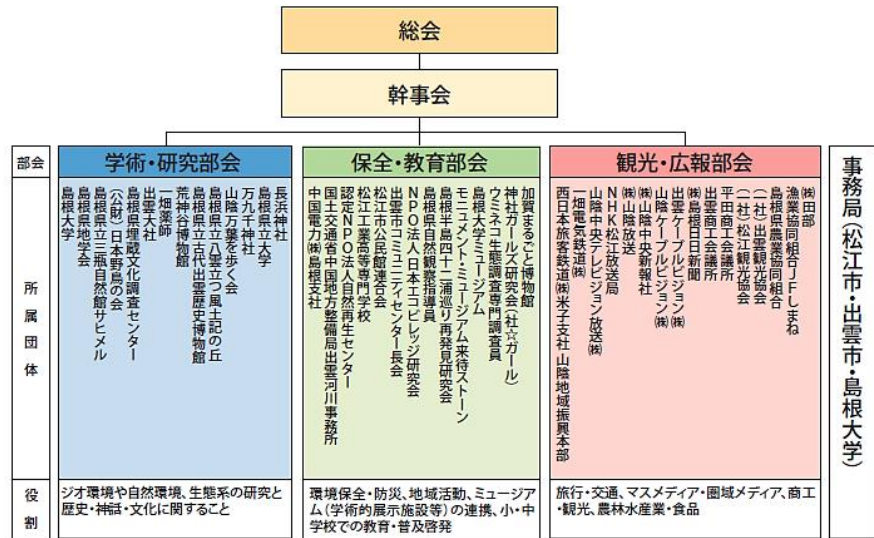
施設状況を以下に示す。特に松江歴史館、古代出雲歴史博物館、^{こうじんだに}荒神谷博物館、出雲弥生の森博物館、八雲立つ風土記の丘展示学習館は古代や近世などの国宝級資料を展示している。これらの施設を活用し、ジオパーク活動を広く発信していく。

種別	立地	名称			
博物館相当	松江市	モニュメント・ミュージアム来待ストーン			
	出雲市	古代出雲歴史博物館			
		荒神谷博物館 出雲弥生の森博物館			
歴史・自然資料館	松江市	島根大学ミュージアム本館 八雲立つ風土記の丘展示学習館 鹿島歴史民俗資料館 松江市立出雲玉作資料館 松江歴史館 いずもまがたまの里 伝承館			
		出雲市	出雲科学館 出雲文化伝承館 平田本陣記念館 宍道湖自然館ゴビウス		
			公民館・コミュニティセンター	松江市 公民館 32 館 出雲市 コミュニティセンター 43 館	
				ホール・会議室	松江市 島根県民会館 松江市総合文化センター・プラバホール くにびきメッセ 松江テルサ 市民活動センター（スティックビル）
			ホール・会議室		出雲市 出雲市民会館 ビックハート出雲 平田文化館 大社文化プレイスうらら館
		教育施設			松江市・出雲市 小学校 78 校（松江市 37+出雲市 41） 中学校 34 校（松江市 18+出雲市 16） 高等学校 21 校（松江市 13+出雲市 8） 高等専門学校 1 校（松江市 1） 大学:2 ・島根大学（松江キャンパス・出雲キャンパス） ・島根県立大学（松江キャンパス・出雲キャンパス） 専門学校 9 校（松江市 6+出雲市 3）
	図書館				松江市 4 館 出雲市 8 館

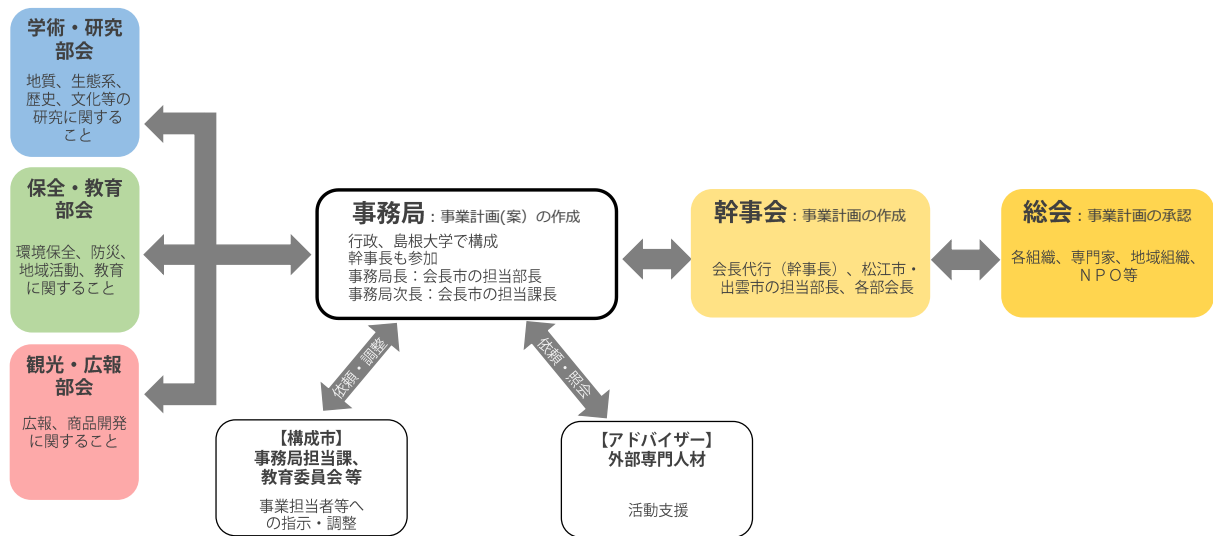
1-4 組織、運営・事業計画、予算

(1) 運営組織

本構想の活動を幅広く展開し、計画的かつ効果的に施策を実施していく体制として、松江市、出雲市、高等教育機関、報道機関、交通機関、地質・生態系・歴史の関係機関、民間団体等からなる「島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会（以下「推進協議会」という。）」を設立した。



※平成 29 年 3 月現在



意思決定・運営の流れ

推進協議会は総会、運営委員会（平成 29 年度から幹事会へ改組）、部会の 3 階層に区分し、機動的な組織運営を行っている。

平成 28 年度は、総会 1 回、運営委員会 4 回、3 部会をそれぞれ 4 回（学術・研究部会は 5 回）開催するとともに、松江市、出雲市、島根大学で構成する事務局会を 25 回実施した。なお、平成 29 年度から松江市役所内に「国引きジオパーク推進室」を新設し、地質の専門員や専属の事務局員を配置するとともに、行政部局間の連携を一層強化していく。

(2) 学術的サポート

本構想における学術的なサポート体制は、島根大学の「くにびきジオパーク・プロジェクトセンター」等との緊密な連携により確立しているほか、歴史・考古・文化面でも県や市、民間の専門家等のサポートが受けられる体制を構築している。特に、推進協議会内には学術・研究部会を設け、地質学的な観点と歴史・文化の観点との両面から本構想エリアに関する研究を続けている。



学術・研究部会開催の様子

具体的には、本構想の研究、定期的な探訪会開催、論文等の提供、保全と活用に向けた科学的見地からのアドバイス、ガイド養成講座の講師招聘等を主なサポート内容としている。

■ 専門家の専門分野と関与の程度（平成 29 年 3 月現在）

区分	専門家	所属	専門分野	関与の程度
地質・地形	野村 律夫	島根大学教育学部自然環境教育講座(地学)	地質学、層位・古生物学	事務局
	入月 俊明	島根大学大学院総合理工学研究科	地質学、層位・古生物学	事務局、ガイド講座
	辻本 彰	島根大学教育学部自然環境教育講座(地学)	地質学、層位・古生物学	事務局、ガイド講座
	林 広樹	島根大学大学院総合理工学研究科	地質学、層位・古生物学	地質・地形サイネージの作成・評価
	高須 晃	島根大学大学院総合理工学研究科	地質学、岩石学	地質・地形サイネージの作成・評価
	高尾 彬	島根県地学会 副会長	地学教育	部会員
	林 正久	島根大学名誉教授	地形学	地質・地形サイネージの作成・評価
	石賀 裕明	島根大学大学院総合理工学研究科	環境地質学	地質・地形サイネージの作成・評価
	酒井 哲弥	島根大学大学院総合理工学研究科	地質学、地層学、堆積学	地質・地形サイネージの作成・評価
	大平 寛人	島根大学大学院総合理工学研究科	地質学、岩石・鉱物・鉱床学	地質・地形サイネージの作成・評価
	新宮 敦弘	株式会社藤井基礎設計事務所	地質学	地質・地形サイネージの作成・評価
	山内 靖喜	島根大学名誉教授	地質学	地質・地形サイネージの作成・評価
	武島 正幸	島根県地学会	地質学	地質・地形サイネージの作成・評価
成瀬 敏郎	元兵庫教育大学教授	地形学	地質・地形サイネージの作成・評価	
防災	浅田 純作	松江工業高等専門学校 副校長 (松江市防災会議委員)	環境建設工学	部会員
生態系	佐藤 仁志	(公財)日本野鳥の会 理事長	動植物生態系	部会員、ガイド講座
	井上 雅仁	島根県立三瓶自然館サミエル	動植物生態系	部会員、ガイド講座
	濱田 義治	島根県野生生物研究会 (ウミネコ生態調査専門調査員)	野生生物	部会員
歴史・文化・神話	内田 律雄	島根県埋蔵文化財調査センター	考古学	部会員
	会下 和宏	島根大学 ミュージアム	考古学	部会員、ガイド講座
	平野 芳英	荒神谷博物館 副館長	考古学	部会員
	川島 芙美子	山陰万葉を歩く会 会長	歴史学	部会員、ガイド講座
	的野 克之	島根県立古代出雲歴史博物館	歴史学	部会員
	秦 和憲	長浜神社 宮司	歴史学	部会員
	小泉 凡	島根県立大学 教授	民俗学	部会員
	錦田 剛志	万九千神社 宮司	歴史学	部会員
	川谷 誠一	出雲大社 総務部長	歴史学	部会員
	飯塚 大幸	一畑薬師	四十二浦巡り	部会員
	関 和彦	日本地名研究所 所長	歴史学、四十二浦巡り	顧問

(3) ビジターセンター候補地

本構想エリアは広域にわたることから、観光客等への情報提供やジオガイドの紹介などの機能を持つビジターセンターは複数必要になると考えている。



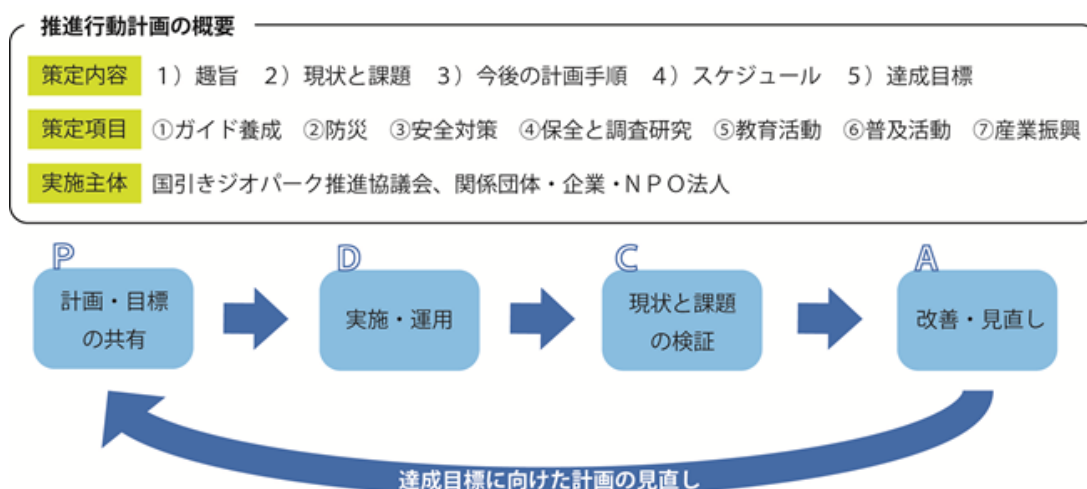
このため、推進協議会では本構想エリアの東西に位置する既存の施設を利用する形でのビジターセンター運営を想定しており、主要な地質・地形サイトに近い場所で、アクセス面や人的配置といった観点から、以下の4施設を中心に、拠点化を進めていく。

名称	場所	機能
人と情報・文化の交流館（マリンプラザしまね）	松江市島根町加賀	インフォメーション、学習、ガイド
日御碕観光案内所	出雲市大社町日御碕	インフォメーション、ガイド
出雲科学館	出雲市今市町	学習
松江国際観光案内所	松江市朝日町	インフォメーション

(4) 事業計画

本構想が目指すジオパークの将来像や理念を実現するため、5年間の具体的な活動指針として「島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想推進行動計画」を策定した。

この計画において、具体的な活動内容やスケジュール等を整理し、事業を着実に推進するとともに、PDCAサイクルによる効率的な進捗管理を行い、目標の達成に向けて不断の見直しを行う。また、本構想の活動は推進協議会が中心となるが、民間企業やNPOをはじめとする各種団体、国・県や各種関係機関等との連携を図り、目標を共有することで、それぞれの立場でできることから積極的に取り組みを進めていく。



(5) 予算

推進協議会の予算について、初年度の平成28年度は20,000千円の事業費で活動を行ったところである。当面、年間20,000千円規模を確保し、その財源として、各種補助金の活用や、構成市からの負担金で賄うとともに、民間団体などからの会費についても今後検討していく。

また、必要に応じ、協賛金を呼び掛けるとともに、将来的には、ガイド事業、物品販売等による推進協議会独自の収益を確保し、自立自走できる運営を目指すこととしている。併せて、関係機関等においても、推進協議会と連携してジオパーク関連事業を行うこととしている。

さらに行政側では、最上位計画である「松江市総合計画」「出雲市総合計画」の中に、本構想の推進を位置付けており、人員体制や予算等の充実を図りながら、中・長期的に産業、教育、防災などの関係部局が一体となって本構想を推進していく方針である。

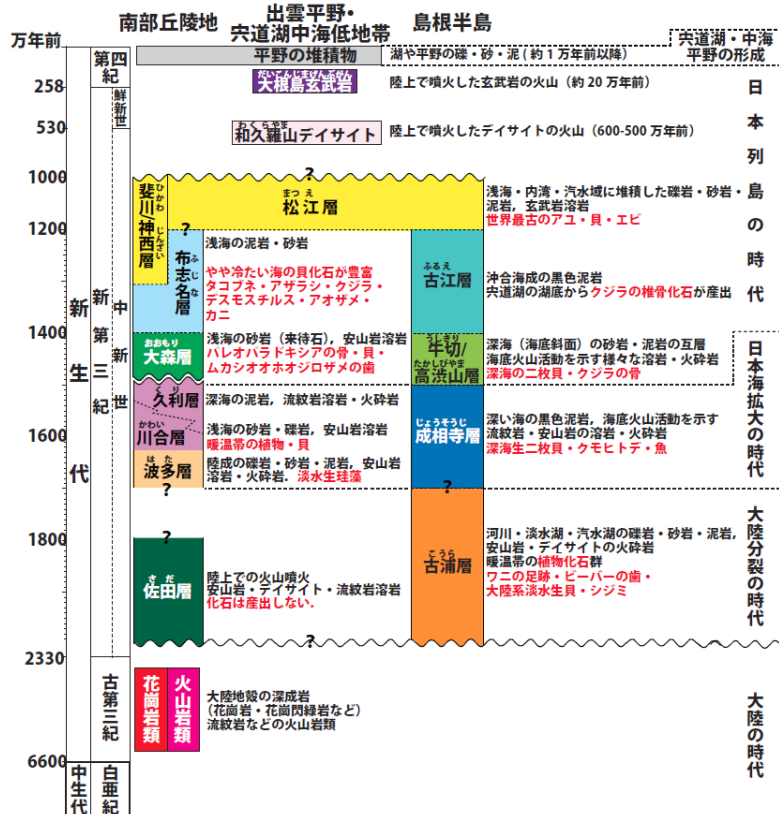
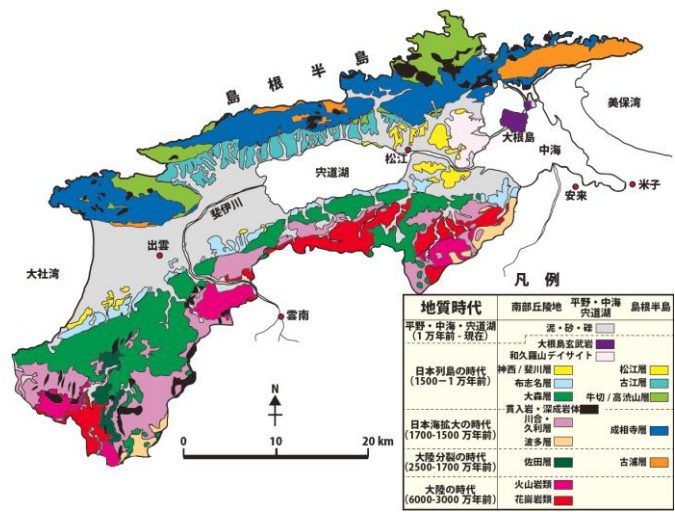
併せて、国、県とともに進めている大山隠岐国立公園のナショナルパーク化の取り組みとも緊密に連携し、拠点施設の整備や看板設置、学術研究、保全・教育、観光・広報といった活動の強化など、ハード・ソフト両面の充実を図っていく。

第2章 地質・地形遺産

2-1 申請地域の地質・地形の概要

島根半島は、山塊がほぼ東西 67 km にわたって雁行状に連なっており、その南側には出雲平野・宍道湖・松江平野・中海そして弓ヶ浜半島へと連なる低地帯が広がる。宍道湖・中海は連結潟湖として、国内最大の汽水湖を形成している。さらに低地帯の南には、白亜紀から古第三紀に形成された深成岩類（花崗岩類）や火山岩類が広く分布する。島根半島と宍道湖・中海低地帯は、複背斜と複向斜に対応している。ここは、新第三紀の日本列島と日本海の形成に関わった地殻変動の中で日本海南西端に位置する地域である。

そのため、本構想エリアの地球科学的特徴は、“グリーンタフ地域”に位置する日本海側の八峰白神ジオパーク、男鹿半島・大潟ジオパーク、ゆざわジオパーク、山陰海岸ジオパーク、隠岐ユネスコ世界ジオパーク等と一部共通しているが、他の地域には無い特徴も

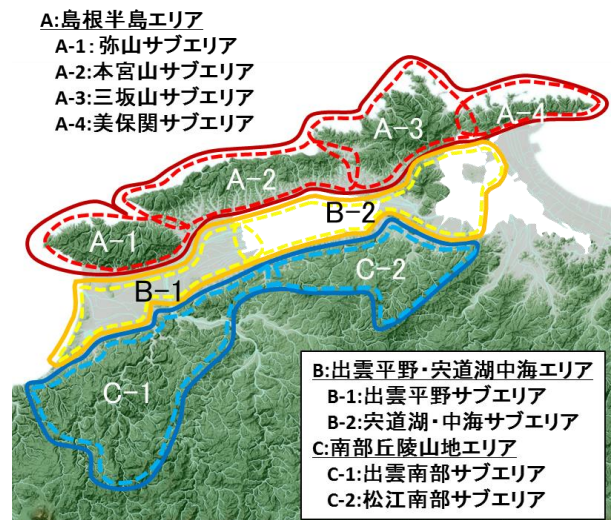


数多くある。フィリピン海プレート¹の運動による日本海形成直後の激しい海底火山活動と複雑な断層・褶曲運動²が起き、それが北部にリアス式海岸のある島根半島、中央部に低地帯、南部に丘陵地といった他のジオパークには見られない特異な地形形成へと繋がっている。そのため、この低地帯に日本で最大の連結汽水湖である中海・宍道湖と平野が発達し、古代出雲文化の発展の礎となった。また、本構想エリアでは、約 2,000 万年前の大陸分裂の時代に形成された地層から、近年、他のジオパークから報告されていないユーラシア大陸系の陸上・陸水生動物化石が続々と発見され、現在と異なる多様な動物相が明らかにされる可能性が挙げられる。さらに、日本海形成終了後の約 1,300 万年前に繁栄した³布志名動物群⁴が見られることも特筆すべき点となっている。これは徐々に地球が寒冷化し、日本海が閉ざされていく中で、唯一当時の日本海沿岸部の環境や生物相を明らかにしてくれる化石動物群である。



このように本構想エリアの地質は地質学的分野で、世界的に注目されている縁海形成のプロセスが連続的に良く保存され、海底火山に関する国際的な研究が行われている貴重な場所である。

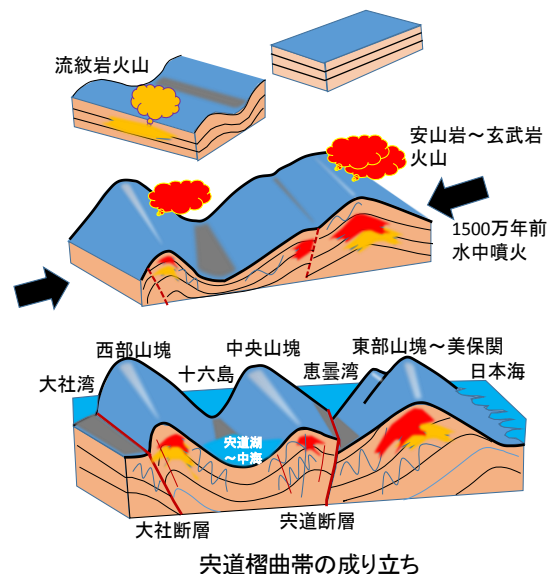
本構想は歴史文化の形成、人々の交流の背景となった地形地質を学び、これらの関係が有機的に結び付いていることを分かりやすく説明するために、前述した3つのエリアの中にサブエリアを設けた。



A 島根半島エリア：大規模な地殻変動を今に感じる大地

島根半島は、大陸分裂から日本列島の形成に至る中新世の堆積岩や海底火山活動で特徴づけられる。半島の地形は、西部、中部、そして東部の三つの山塊が並走している特徴がある。このような山塊の配列は、雁行状配列と言われ、「宍道褶曲帯」と呼ばれるほど大規模な地殻変動が起こったことを示す学術的価値の高い特徴的な地質構造である。

ここでは、これらの山塊をサブエリアに区分する。地形学に従った名称として、西部は⁵弥山⁶、中部は⁷本宮山⁸、東部は⁹三坂山¹⁰と¹¹美保関¹²に分けて呼ぶことにする。このような地形が、『出雲国風土記』の意宇郡



に記された、いわゆる「国引きの詞章」または「国引き神話」と呼ばれる記述の中に見る「国」の区分と一致していることは極めて興味深い。また、「国引きの詞章」において、特別な部分として触れられている国の境界、すなわち「折絶」が地形を反映したものとなっている。地形のもつ意義が古代より認識されていたことが理解できる。



島根半島エリアのサブエリアと国引き詞章に記された「国」区分との対応関係

B 出雲平野・穴道湖・中海低地帯エリア：古代出雲文化の基盤となった大地

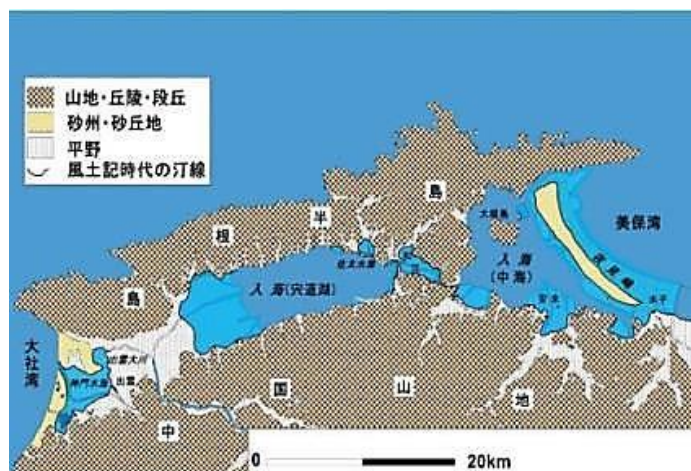
低地帯の発達、世界的に起こった海面水位の昇降運動と地域地質が密接に関連している。後氷期以前の島根半島と本土側との間は、全域が陸地



出典)中村(2008)島根県立三瓶自然館研究報告

で、段丘など台地状の地形とそれを切る谷地形からなる景観が広がっていた。最終氷期最寒冷期の海面水位は、現在より約 120 m 低かったため、その時期の海岸線はこの地域から遠く離れていた。やがて、氷期が終わって温暖化し、7,000～5,000 年前になると、海進が進んだ。このときの海面水位は、現在より 2 m 高かったと推定されている。南部の陸域と島根半島の間には、大社湾から穴道湖、中海に続く大きな海峡が出現した。大社や浜山付近にある砂の堆積物はこの時期に形成された砂州である。縄文時代の終わり頃になると、三瓶大平山火砕流によって大量のデイサイト礫が神戸川河口に供給され、扇状地性三角州が急激に前進するようになる。今から約 2,700 年前までには、平野の一部は島根半島側とつながり、西の潟湖（神門水海）と東の入海（穴道湖）の二つに分離した。その後も三角州の発達は東西方向に向かってさらに前進し、『出雲国風土記』に記載された出雲平野の拡大の様子はこの時期のことである。近世初頭までには西の神門水海はほとんど埋めつくされ、神西湖はその名残を示す湖となっている。

他地域と異なり、中国山地の山陰側の花崗岩類には磁鉄鉱が豊富に含まれている特徴がある。そのため、古代から「たたら製鉄」が行われ、特に近世以降にな

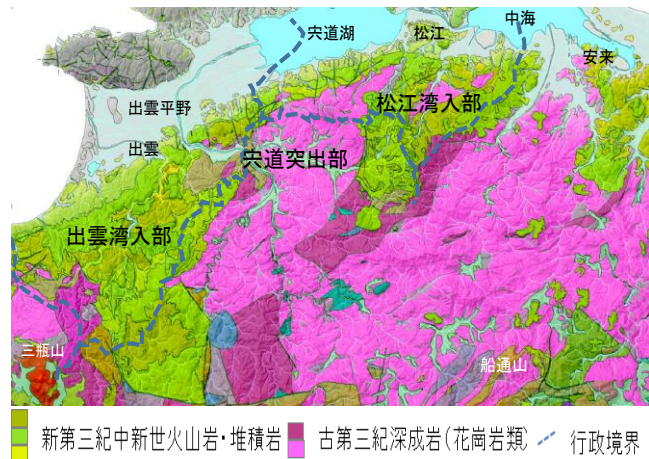


風土記時代の穴道湖・中海

ると、^{ひいかわ}斐伊川、^{かんだがわ}神戸川上流域でさらに盛んになり、^{かなな}鉄穴流しによる大量の土砂供給、平野における改川といった人為的な側面が顕著になる。そのため、平野の埋積速度は以前に比べて格段に速くなり、^{ひいかわ}斐伊川は天井川化し、水害をもたらす地形となる一方で、‘出雲のナイル’と呼ばれるほど、肥沃な農耕の土地形成につながった。

C 南部丘陵山地エリア：古代出雲の中心であった大地

この地域の地質は、白亜紀後期から古第三紀にかけて形成された深成岩類（花崗岩類）や火山岩類を基盤として、新第三紀の火山岩や堆積岩が発達する。両者の間には興味深い分布が見られ、^{しんじこ}宍道湖の南岸域では深成岩類が広く分布する。風化して真砂土となった花崗岩類が北に張り出し、宍道突出部と呼ばれる岬状を呈す。西側の中新統分布域は出雲湾入部、東側のそれは松江湾入部と呼ばれている。それぞれの湾入部では、陸成層から深海の海成層へと堆積盆地が深くなっている。



南部丘陵山地エリアの地質
出典)産総研 地質調査総合センター HP

南部丘陵山地エリアは、1,500～1,400 万年前に起こった大規模な地殻変動を記録する場所として特に重要である。この変動によって松江出雲の南部域は広く隆起し、陸化した。丘陵地に見られる礫岩層や砂岩層は、この地殻変動によって形成された陸成から浅海成の地層である。さらに、宍道湖南岸に沿って見られる砂岩層・泥岩層は布志名層と呼ばれ、この地層からは浅海生の貝類など、世界的にも珍しい化石が産することで有名である。これらは中新世中期から後期（1,500～1,100 万年前）に、主に東北日本で繁栄した温帯性の^{しおぼらやま}塩原耶麻動物群の一部をなし、^{ふじな}布志名動物群と呼ばれている。松江の市街地周辺の丘陵地は布志名層よりも新しい時代に堆積した松江層の砂岩層及び玄武岩溶岩からなっている。

2-2 主要な「地質・地形サイト」の解説とその価値

2-3 主要な「地質・地形以外のサイト」の解説とその価値

主要なサイトの解説については、本構想の特徴である大地の成り立ちと歴史文化との融合を、一体的かつストーリー性を持って記述するために、「地質・地形サイト」と「地質・地形以外のサイト」をまとめる形で整理している。このことは、ジオパーク活動やジオツアーに対して一般の人に関心を持ってもらうことにも効果的である。

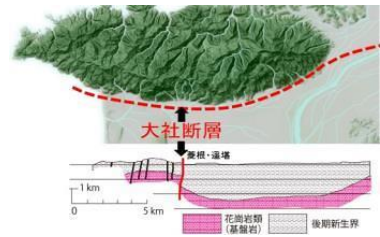
なお、ここでは地質・地形サイトを‘★’、地質・地形以外のサイトを‘☆’として表示する。

※詳細については、添付資料の「地質・地形サイトカード」及び「地質・地形以外のサイトカード」に記載している。

A-1 ^{みせん} 弥山サブエリア：引き裂かれる地殻の音が響く大地

落差が1,000 mに達し、中期中新世に形成された大社断層をはじめ、東西方向に延びた多くの断層と深海の海底火山岩は、地殻変動と神話がつながる世界を提供してくれる。

本サブエリアには、深海の海底火山活動に伴う熱水の噴出によって形成された黒鉱鉱床が分布し、かつては鱒淵・峠・唐川などの鉱山群があった。



主要なサイト

★**大社断層の巨大な擦痕**：国内でも最大級のスケールの鏡肌（スリッケンサイド）が見られる場所。立体的に曲がりくねった断層とその表面には急激な岩石の破壊で形成された巨大な条線が見られる。岩石同士がずれるときに付いた爪痕が直線状に残っている。



★**韓竈神社周辺の黒鉱鉱床**：この付近の岩石は、海底火山によって作られた緑色凝灰岩の岩相を呈している。この地域に形成された黒鉱鉱床からは銅や石膏が採掘され、かつては地域の主要な産業であった。



『出雲国風土記』には韓 銓 社、延喜式には、韓竈神社と記されている。祭神の素盞鳴命すきののおのみことが新羅から植林法や鉄器文化を伝え、カラカマのカマは溶鉱炉を意味するとも言われている。また、この神社より奥には、金掘り地区の地名や自然銅、野タタラ跡もあり、鉄器文化の開拓と深い関係が窺われる。

★**日御碕の柱状節理**：今から1,600万年前に噴火した海底火山の流紋岩の溶岩ドームに見られる柱状節理。



近くにある日御碕神社は島根半島の西端に位置し、神の宮に素盞鳴命すきののおのみこと、国指定重要文化財の日沉宮ひしずみのみやに天照大御神あまてらすおおみかみを祀る。

★**弥山のごえんゴウロ**：ごえんゴウロのある場所は、弥山みせんをつくっている流紋岩の巨大な岩脈群が崩落した、いわゆる山崩れによって中央に5円硬貨そっくりの形ができた。周囲の樹木やシダ植物を寄せ付けない環境にあって、その形と大きさは、国内でも極めてユニークで、山崩れの広がり、海拔320 mから150 m、最大幅は約75 mの楕円形である。



出雲大社の御祭神である大国主神おおくにぬしのかみは縁結びの神様として知られる。地形のゴエンと縁結びのゴエンが一致するのが面白い。『古事記』や『日

本書紀』では、^{おおくにぬしのかみ} 大国主神は^{すくなびこなのかみ} 少名毘古那神と共に^{あしほらのなかつくに} 葦原中国の国づくりを行ったほか、病気やけがを治す医療法や温泉なども広めたと言われている。

★^{いのめ} 猪目洞窟^{いのめ}：猪目洞窟は、噴出した火山砕屑物が数百度のマグマ起源の熱水によって粘土鉱物に変質したため、薄緑から濃緑色まで濃淡が異なる色を示す。このような色合いの海食洞は、周囲の暗色で凹凸に富んだ岩石と異なった景観となっている。



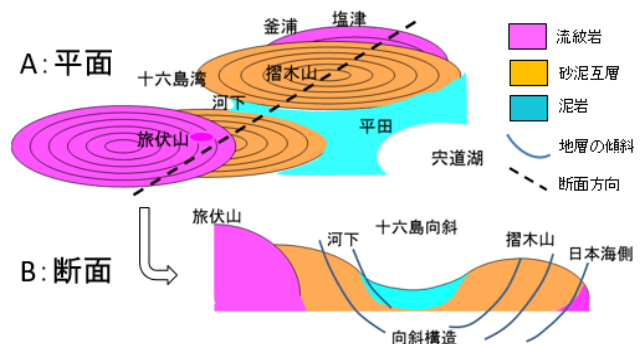
この海食洞から古代人の遺骨が発掘された。『出雲国風土記』には「夢にこの磯の窟の辺に至らば必ず死ぬ。故、俗人古より今に至るまで、黄泉の穴と名づくるなり」と書かれている。

「国引き神話」が伝える【^{こづ} 去豆の折絶^{おりたえ}】とは ～地層が褶曲してできた折絶～

^{みせん} 弥山山地と^{ほんぐうさん} 本宮山山地の境界は、^{うつぶるい} 十六島湾と平田市街を經由して、^{しんじこ} 宍道湖の北西岸へと連なる低地形をなす。^{みせん} 弥山山地東部の^{はなたかせん} 鼻高山や^{たぶしさん} 旅伏山（標高 421 m）の北側斜面は、^{うつぶるい} 十六島湾へ向けて北傾斜をなす一連の地層が累積している。一方、^{ほんぐうさん} 本宮山山地西端の^{うつぶるい} 十六島半島は^{すりぎやま} 摺木山（標高 415.2 m）を最高点として南傾斜をなす。そのため、^{みせん} 弥山山地と^{ほんぐうさん} 本宮山山地西端の間で明確な向斜構造をなしている。向斜軸部は軟岩でできており、風化に弱く侵食されやすいことから、低地形が形成された。



去豆の折絶



「去豆の折絶」の成り立ち

A-2 ^{ほんぐうさん} 本宮山サブエリア：地球の鼓動が轟く大地

この大地には、安山岩に由来する砂岩・泥岩互層よりなる洗濯岩のような地層が発達する。その互層は地球の鼓動のようなリズム感がある。多量の砕屑物が、不安定な斜面上で頻繁に発生する重力流により運搬され堆積したものである。

東西性の断層に支配された地形を呈し、日本海側には断層崖を形成している。断層に沿って、流紋岩の岩塊が点在し、それらは信仰の対象にもなっている。このサブエリアの南側は、塊状で層理の無い、おそらく水深 500～1,000 m もの深い凹地で堆積した地層が分布する。

主要なサイト

★**小伊津海岸の洗濯岩**^{こいつ}：この海岸に露出する地層は、約1,400万年前の海底で堆積した地層である。洗濯岩はマイクロケスタとも呼ばれ、大陸斜面で発生した乱泥流や土石流により形成された砂岩と泥岩が繰り返す地層である。



★**赤浦海岸**：赤浦海岸は、灰白色、黄褐色、淡赤色、赤色、淡緑色、緑青色など多様な色合いを示す流紋岩が多い磯浜海岸。黄褐色から淡赤色の礫が全体の約70%を占める。汀線付近の流紋岩円礫が海水で濡れると、黄褐色から淡赤色が一層濃く見られるため、全体として赤色の目立つ海岸となる。赤浦海岸は、礫の供給源となる赤色系の流紋岩体の露頭が周囲にないため、不思議な景観を呈す。



江戸時代の地誌である『雲陽誌』^{うんようし たてぬいぐんこざかい}の楯縫郡小境の項には、この赤浦の海岸の石は持ち出し禁止とされ、持ち出すと災いが及ぶと伝えられている。臨濟宗の古刹、一畑薬師は、894年坂浦の漁師与市が赤浦の海岸で一体の仏像を拾い上げ、その仏像を一畑山の山中に薬師堂を設け、安置したことに始まる。

★**唯浦の直立層**^{ただうら}：中新世の地層で直立するほど大規模に変形している場所は国内でも珍しい。島根半島が激しく変形と変位をしている様子を知ることでできる代表的な場所である。この「直立層」は、ここでは孤立した状態になっているが、周辺の地層と併せて見ると、断層を伴った背斜構造となっている。



この地は、『出雲国風土記』には、海苔が採れる能呂志嶋^{のろしじま}と記載されている。直立層の層理面には大正元年12月、嵐の日に遭難した人々を救助するため、自ら尊い命を捧げた若き人々の「義勇の碑」が刻まれている。



★**大船山**^{おおふねさん}：流紋岩の火山砕屑岩及び溶岩よりなる。流紋岩の側方への発達が悪く、独立的な山容を呈している。大船山の山頂近くには数mの岩塊があり、烏帽子岩^{えぼし}と呼ばれ、その付近は急崖をなし、断層地形となっている。



『出雲国風土記』によると、出雲の神名樋山の一つで、石神とされる鳥帽子岩は多伎都比古命の御魂とされ、周囲には小石神が百余りあり、雨乞いの神様と記されている。

「国引き神話」が伝える【多久の折絶】とは ～断層と侵食でできた折絶～

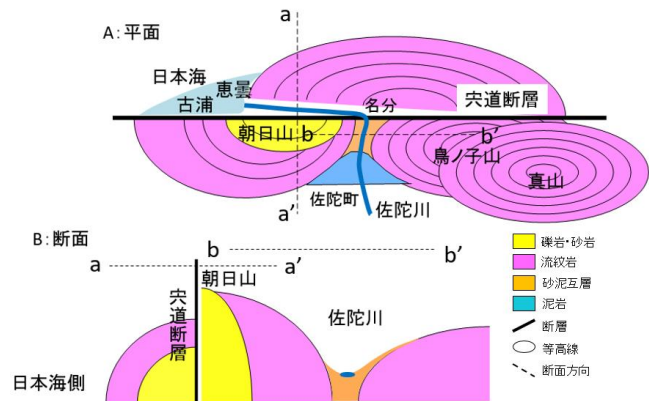
佐陀川を挟む東西2つの流紋岩火山岩体がこの場所ではくびれるように発達し、そのくびれ部分を占める砂岩頁岩互層の地層の発達も悪い。地層の厚さは、佐太神社付近で140～150 m程度でしかない。そのため、もともと東西でつながっていた山地が南北方向に佐陀川の侵食を受けやすく、地形が分断された。

一方、流紋岩でできた山の北側斜面には、島根半島の形成に関わった宍道断層と、それから派生した東西性の断層が発達する。この付近の地層も東西に広がり、断層に沿っている。そのため、地層は侵食を受けやすい。

佐陀川が河口の鹿島町恵曇から鹿島町名分までほぼ東西の流れであったのが、ここで南北に流路を変更しているのは、このような地質構造を反映したものである。断層と侵食による2つの地質学的要因によって、恵曇側と佐陀町側は、低地形をなして繋がることができた。



多久の折絶



「多久の折絶」の成り立ち

A-3 三坂山サブエリア：海底噴火がつくった大地

三坂山山地は、三坂山(標高 535.7 m)、枕木山(標高 453 m)、真山(標高 256.3 m)・御岳山(標高 294.7 m)・鳥ノ子山(標高 252 m)の3つの山地を造る流紋岩が発達するとともに、千数百万年前とされる海底火山の安山岩・玄武岩溶岩と火山砕屑岩が広く分布する。ダイナミックな海底火山活動の様子が観察され、特徴的な火山侵食地形が形成されている。

主要なサイト

★**瀬崎の崩落火道**：安山岩の火山角礫岩中に見られる大小の角礫が密集した幅約 5 m の特徴的な岩塊。この岩塊は周囲の火山角礫岩との境界が侵食されており、その侵食状況から、岩塊のももとの形状は垂直に近い円柱状だったと見られ、当時の海底火山の火道を示す給源岩脈であると考えられる。



海食崖の頂には「瀬崎の成（まもり）」があったと『出雲国風土記』に記されている。

★**加賀の潜戸**：島根町加賀の^{かか}一帯は、千数百万年前の安山岩溶岩（一部玄武岩を含む）とその火山^{くけど}碎屑性堆積物よりなる。加賀の^{かか}潜戸は、半島の形成に関わった地殻内部の力を反映している。新^{くけど}潜戸とその約 1 km 東にある^{まどしま}的島は、同じ東西性の断層によって洞門を形成している。旧^{くけど}潜戸から新^{くけど}潜戸へ延長する南北性の断層は、破碎でできた断層角礫岩を伴っている。

『出雲国風土記』の加賀の郷では、加賀の地名は新（神）^{くけど}潜戸で^{きさかひめ}枳佐加比売が金色の弓をもって矢を射ると洞窟の中が光輝いたので、^{くけど}‘カカ’と言う。旧^{くけど}潜戸は^{こいずみやくも}仏になった子供が親を慕い、石を積み上げたと云われる^{くけど}賽の河原があり無常観を呈す。明治の文豪小泉八雲は^{くけど}潜戸観光を果たし、その時の様子を『知られぬ日本の面影』に記している。



★**多古の七つ穴**：この一帯の岩石は主に海底火山が噴出した玄武岩溶岩や安山岩溶岩が海水により急冷され、破碎した水冷自破碎溶岩（ハイアロクラスタイト）である。海食崖に南北方向に穿たれた海食洞が大小合わせて集中して発達し、幾つかの海食洞は内部でつながり、見応えのある景観を呈す。

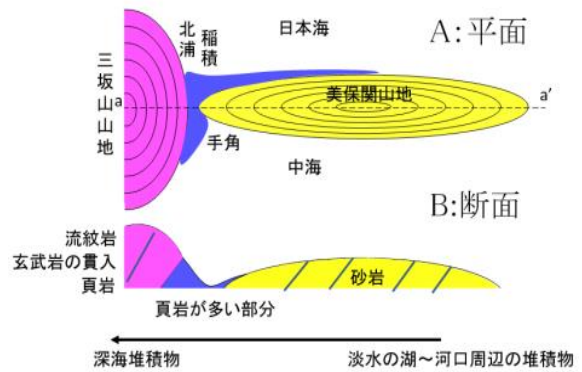


★**瀬崎のドンド穴**：海岸から内陸へ約 100 m 離れた場所にできた直径 25 m の円柱状の穴。この穴の周辺は、玄武岩の溶岩や火山碎屑岩よりなり、南北方向と東西方向の 2 系統の断層が見られ、南北方向の断層部分には海食洞が形成されている。ドンド穴は、海食洞を通して、交差する部分の岩盤がさらに海岸侵食を受けて形成されたと考えられている海食洞と、柱状の窪地がセットになった珍しい地形をなす。



「国引き神話」が伝える【^{うなみ おりたえ}宇波の折絶】とは ～地層の境界でできた折絶～

島根半島の最下位層は礫岩、砂岩、頁岩からなる古浦層で、西に傾斜した半ドーム状を呈し、上位の成相寺層へ移行する。「宇波の折絶」と呼ばれる部分の地形は、このような古浦層と上位の成相寺層の境界部分に相当する。両地層の境界部分の頁岩層（成相寺層の下部）は、古浦層の礫岩や砂岩より風化に弱いため、南北方向に地形が窪む。このような、三坂山と美保関の両サブエリアを構成する岩相の違いが境界部分を低地形化させている。



「宇波の折絶」の成り立ち



宇波の折絶は中央部の低地、手前は大根島

A-4 ^{みほのせき}美保関サブエリア：大陸の縁にできた湖がつくった大地

ここに分布する砂岩を主体とする地層は、大陸分裂の時代のもので、湿潤温暖気候を示す台島型植物化石群や動物化石が産出する。砂岩には約 2,000 万年前の水の流れを示す流痕などやそこで生活していた生物の生痕も見られ、汽水生シジミ化石などは豊かな自然環境を彷彿させる。堆積岩は熱変質によって特有の緑色を帯び、石材として古代より利用された。



ワニの足跡



シジミの仲間の化石



葉(ハンノキの仲間)の化石

主要なサイト

★**美保関の海食崖**^{みほのせき}：扇状地と三角州が一体化して形成された地層。氾濫原や浅い湖で形成された地層も見られる。斜交層理などの様々な堆積構造が観察できる。国内最古級のワニや四趾性大型哺乳類の足跡化石が発見されているほか、ビーバーの歯化石、哺乳類の骨や歯化石、スポン化石、コイの咽頭歯化石、シジミ化石などの大陸系の陸生・陸水生動物化石が産する。メタセコイアやクルミ属などの葉や果実の化石なども多い。

美保関灯台は、1898年に初点灯された山陰最古の灯台（高さは14 m）で、水面からの高さは83 m。珠洲岬（能登半島）の^{ろっこうさき}緑剛崎灯台と同じ設計である。堆積岩のブロック塀には、2,000万年前の河川が運んだ粒子の流れが長年の風化によって浮き上がっている。



★**沖の御前**^{おき ごぜん} ^{じぞうざき}：地蔵崎の北東約4 km 沖合の海に浮かぶ岩礁地で灯台や鳥居が設置されている。この島は島根半島の地質構造がさらに東側へ延長していることを示している。

沖の御前は、日本海拡大の時期に形成された流紋岩からなり、当時の活発な海底火山活動を示す。

『古事記』の「国譲り神話」では、えびす様こと「事代主命」が鯛釣りをしていたとされる伝説の名所。毎年5月5日には、^{ことしろぬしのみこと}沖の御前を舞台に「神迎神事」も執り行われている。



★**権現山洞窟**^{ごんげんやま}：流紋岩にできた海食洞窟。縄文土器（縄文時代後期）・石鏃・ヤス・貝類・獣骨などが見ついている。貝類の種類も多く、豊かな食材に恵まれていた。住居跡とされ、近くのサルガ鼻洞窟からは、人骨を含む縄文時代前期末～晩期～弥生時代の遺物が多く見ついている。



★**青石畳通りと森山石**^{もりやまいし} ^{みほのせき}：えびす社の総本社である美保神社の入り口付近に敷設された石は、美保関町森山や日本海に面した海岸などから採石された古浦層の森山石（凝灰質砂岩）である。福井市足羽山で採掘された^{もりやまいし}笏谷石（デイサイト質火山礫凝灰岩）もある。敷設されたのは江戸時代後期。古い町並みと石畳の道は、北前船で賑わった往時を偲ばせる。



B-1 出雲平野サブエリア：出雲のナイル^{ひいかわ}斐伊川の賜物

出雲平野は斐伊川と神戸川が内湾を埋積してできた山陰最大の三角州平野で、河川の長さや流域面積に比べて平野が非常に大きい点に特徴がある。その原因として、①島根半島が日本海による侵食を防いでいるという立地条件、②神戸川の上流にある三瓶山からの大量の火山噴出物が平野に堆積したこと（縄文時代）、③斐伊川上流部で盛行した、「たたら製鉄」のための鉄穴流しによって大量の土砂が流出した（江戸時代）ことが挙げられる。斐伊川がナイル川デルタのように三角州を急速に拡大していった様子は、「出雲のナイル」に例えられる。

主要なサイト

★**稲佐の浜**：出雲大社の真西、出雲市大社町杵築北～杵築西に伸びる約2 kmの砂浜海岸。浜の中央に屹立する辨天島^{べんてんしま}は沖合の小島だったが、大社漁港の整備や離岸堤の設置などにより砂浜が拡大し、昭和末期頃には陸繋ぎになった。『古事記』や『日本書記』で、天照大御神が大国主神に国を譲るよう差し向けた建御雷神と天鳥船神の二神が降り立った「伊耶佐の小浜」がこの地名の起源。辨天島は、『出雲国風土記』では門石島と呼ばれ、[鷺の巣がある]と記載されている。



★**菌(園)の長浜**：「菌の長浜」は『出雲国風土記』に国引きの綱とされた地名で、出雲平野の西海岸南部の砂浜を指している。その内陸側は丘陵状になっている。『出雲国風土記』には「菌の松山」が二十二里二百三十四歩（約12.2 km）続くと記されており、現在の海岸線の延長は11.8 kmなので12.2 kmに近い。古代人の距離感覚の優秀さに驚かされる。また、風によって砂が絶え間なく動いていると記載されており、砂丘の状態であったことを表わしている。



★**斐伊川**：斐伊川は全国有数の天井川となっている砂河川。その砂は斐伊川上流域で近世に盛行した「たたら製鉄」のための鉄穴流しによって流出したものである。近世以降、川^{たが}違えによって堤防や、護岸によって河道が固定化されるようになると、周辺の氾濫原より河道が高くなり天井川化が一層進んだ。



出典)出雲河川事務所

自然状態では河川自身が新たな流路を求めて河道を変更し続けるため、天井川となることは稀といわれている。従って、天井川は河道の固定、すなわち堤防で水路が囲いこまれてしまうことが一番の原因で、極めて人為的な地形と言える。

★**浜山砂丘**：南から見て砂丘の平面型は「く」の字型をしており、断面は西側が緩傾斜で東側は急傾斜をなしている。この形は、強い西風によって砂が移動・堆積したことを示している。『出雲国風土記』には特段の記載がないことから、砂丘が大きく成長したのはこの時代以降の可能性が考えられる。

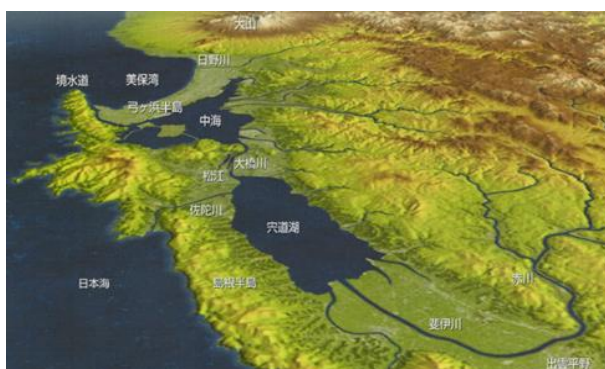
砂丘に降る雨は直接地下に浸透していくため、砂丘の地下は水源涵養地となる。浜山砂丘の東斜面には大干ばつでも枯れない湧水が見られ、浜山湧水群として「平成の名水百選」に選定されている。



矢印が浜山砂丘を示す

B-2 宍道湖・中海サブエリア：古代出雲の歴史文化を育んだ汽水湖

宍道湖・中海とも日本海と水位差が小さいため、斐伊川河口から境水道にかけて広大な汽水域を形成する。中海と宍道湖の塩分は、大橋川を挟み中海が平均で海水の約2分の1、宍道湖が平均で海水の約10分の1である。このように東西約40 kmにわたって塩分が段階的に低下しており、宍道湖と中海は世界でも珍しい連結汽水湖となっている。



出典)出雲河川事務所

宍道湖と中海の間には松江市街が広がる。松江城のある標高29 mの亀田山、標高41.4 mの床几山は市街域の小丘陵をなす。また、後期中新世に噴出した高山や和久羅山は、宍道湖側と中海側を分ける山塊となっている。その南側の麓を東西に流れる大橋川にある塩楯島は、かつて分水嶺だったと考えられている。『出雲国風土記』に塩楯島と記され、宍道湖には蚊島（現在の嫁ヶ島）も記されている。

また、中海の中央部には大根島や江島が存在し、カルデラ湖に浮かぶ中ノ島のようなものであるが、いずれも更新世に陸上に噴出した玄武岩から構成される。

門部王は8世紀中頃、出雲国司として奈良の都より赴任した際に、次のような歌を意宇の湖（中海）について詠じた（『万葉集』）。門部王が見た中海の湖岸の情景が伝わる。

「飲宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば我が佐保川の念ほゆらくに」
 「飲宇の海の潮千の鴉の片思に思ひや行かむ道の長手を」



門部王の碑

主要なサイト

★**嫁ヶ島**：宍道湖内にある唯一の島である。1,200～1,000万年前に島根半島域が浅海化し、松江層と呼ばれる砂岩層が形成された。嫁ヶ島は、その時の火山活動で形成されたアルカリ玄武岩よりなる。島の北側には、



かんらん石と普通輝石を含む玄武岩の一部が湖水面上に分布する。マントル下部物質が上昇した火山で、マントルダイアピルと考えられている。

☆**矢田の渡し**：松江層のアルカリ玄武岩～粗面安山岩わくらやまと和久羅山のデイサイトが南北に狭まるところに設けられた渡し場で、『出雲国風土記』の景観が今も残る貴重な場所。『出雲国風土記』には朝酌促戸渡あさくみのせとのわたりと記されている。促戸とは海峡の狭まった所をいう。現在も、朝酌町と対岸の矢田町の間で船が往来する日本最古の「矢田の渡し」が古代の名残をとどめる。



★**松江城とその石垣**：松江層の砂岩よりなる亀田山かめだやまは、北に続く丘陵地の南端に位置している。松江城の築城にあたって北側は開削された。

松江城の石垣に使われている岩石は、地名をとって次のように呼ばれている。大海崎石おおみさきいし（嵩山だけさん、和久羅山わくらやまの灰色デイサイトと淡褐色デイサイト）、矢田石やだいし（松江層の東光台玄武岩）、忌部石いんべいし（大森層の安山岩もりやま）、森山石もりやま（古浦層の砂岩・礫岩）、島石いし（大根島玄武岩）などである。石垣以外のところでは、嫁ヶ島石よめしまいし（松江層の嫁ヶ島の玄武岩）、来待石よめしま（大森層の凝灰質砂岩きまちいし）も利用されている。



★**大根島とスコリア丘**：大根島は約 20 万年前、現在よりも寒冷な気候で海水面が低かった時代に陸上で噴出した玄武岩溶岩よりなる火山。縄状溶岩（パホイホイ溶岩）や溶岩トンネル、テムラスなどを観察することができる。また、島の中央の大塚山は大根島火山の火口の一つで、多孔質の黒っぽい岩滓がんざい（スコリア）よりなる。

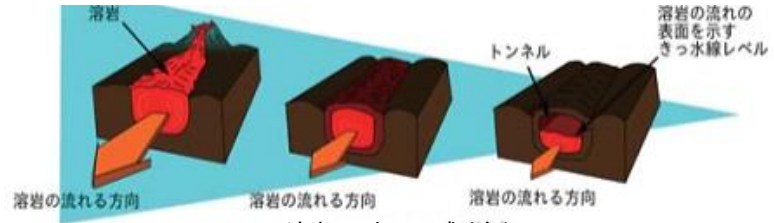
『出雲国風土記』の島根郡には「蛭蝸鳴たこ」とある。古老の伝えとして、杵築御崎きづきのみさきにいたタコを鷺がここに連れてきたので、「蛭蝸鳴たこ」という名が付いたという。また、この島は土地が豊かに肥えているとも記されている。そして「牧」があり、官営の馬を飼育する牧場があったとされる。



★**大根島の溶岩トンネル**（「ゆうきどう幽鬼洞」と「りゅうけいどう竜溪洞」）：流動性に富む玄武岩の溶岩が流れ出して形成された。天然記念物に指定されている。洞窟の環境に適応した放線菌、キョウトメクラヨコエビ、イワタメクラチビゴミムシなどの世界的にも珍しい生物が生息している。

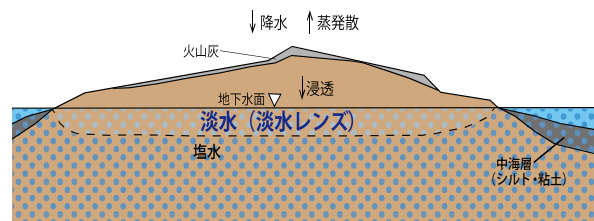


大根島に生息する生物



溶岩トンネルの成り立ち

★**大根島の湧水**：大根島の地表から地下にしみ込んだ地下水は、中海の塩分を含んだ汽水とは混ざりにくく、島の深部にレンズ状に押し込められた形で分布する。このようなレンズ状に分布する貯水体を淡水レンズと呼ぶ。この湧水は、はにゅうかわ波入の湧泉と呼ばれ「島根県の名水百選」に指定されている。



大根島の淡水レンズ

C-1 出雲南部サブエリア：弥生から古墳時代の人々が息づく大地

出雲南部は、出雲平野との境界に近い丘陵地と出雲湾入部の奥が火山地形によって生活圏が規制され、古代より人々の生活圏は丘陵地に近い平野部分に集中していた。特に、国宝に指定され、大量の弥生青銅器が出土した出雲市斐川町「こうじんだに荒神谷遺跡」や国内最大級の弥生墳丘墓が存在する出雲市大津町「にしだにふんぼ西谷墳墓群」は、この地域に有力な集団が存在していたことを物語る。古墳時代後期の6世紀後半頃には、出雲最大級の前方後円墳である「大念寺古墳」が造営されており、西部出雲（現在の出雲市域）の中心地であった。

主要なサイト

★**鞍掛岩**くらかけいわ：中央部が鞍部くらかけいわになっているところから鞍掛岩と呼ばれている。東側の塔（杵）状の岩の中間付近から下部にかけて柱状節理が発達している。鞍掛岩は新第三紀中新世中期のデイサイト（大森層）である。デイサイト溶岩は粘性が高いため、このように盛り上がった形状の山容となることが多い。



『出雲国風土記』には、上朝山地区に六神山（ういたきやま宇比多伎山、いなづみやま稲積山、かげやま陰山、いねやま稲山、ほこやま杵山、かがふりやま冠山）が記載されていて、この鞍掛岩くらかけいわは六神山の中の杵山おおくにぬしのかみに比定されている。大国主神の伝承のある朝山六神山と呼ばれる山々がこの盆地周辺にまとまってあり、古代から朝山のこの一帯は聖なる地として大切に守られてきた。

★**立久恵峡**^{たちくえきょう}：断崖は新第三紀中新世大森層の安山岩～デイサイト質溶岩及び同質火砕岩からできている。固まった溶岩が水蒸気爆発で角礫状になり、それらの岩片が厚く堆積してできた火山角礫岩層。浅い水域で堆積した^{たちくえきょう}立久恵峡という呼び名は崖の様子が、杭が立っているように見えるところから立杭（たちくい）と呼ばれ、その後、立久恵になった。



礫岩の表面は苔類やシダ類が生えやすく、固有種であるオオメノマンネングサ、オッタチカンギク、絶滅危惧種のイワギリソウなどの生育が知られている。「山陰の耶馬溪」の異名を持つ景勝地である。

★**八雲風穴**^{やくもふうけつ}：岩屑が厚く堆積した斜面から夏季に5～6℃の冷気が噴出する崖錐性の風穴。崖錐礫は流紋岩溶岩よりなる。崖錐の規模は標高 150 m



から 240 m まで広がり、多孔性の冷風穴は 180 m 付近にある。一方、温風穴は 230 m 付近に見られるが、吹き出しは極めて弱い。周囲の地層分布から崖錐礫の下は久利層の泥質岩よりなるとみられる。

☆**西谷墳墓群**^{にしだにふんぼ}：この一帯は、^{ふじな}布志名層の軟質泥岩が分布する。出雲平野を北にして、丘陵地が東西に広がっている。

西谷の丘では、弥生時代後期から古墳時代、そして奈良時代にかけて多くの墓が造られ、「西谷墳墓群」と呼ばれる。墳丘を持つ墓だけでも 27 基が密集し、特に弥生時代後期～終末期に造られた 6 基の四隅突出型墳丘墓は、出雲の権力者たちの墓として全国的に有名。鉄剣やガラス勾玉、大量の土器（吉備、北陸系の土器を含む）などが発見されている。



☆**荒神谷遺跡**^{こうじんたに}：この一帯は、^{ふじな}布志名層の軟質泥岩よりなる。

1984 年から 1985 年にかけて、銅剣 358 本、銅鐸 6 個、銅矛 16 本という大量の青銅器が出土した。それまでの銅剣の出土総数は全国で約 300 本、それを一ヶ所で上回った「荒神谷遺跡」の発見は当時の日本古代史学・考古学界を大きく揺るがした。



出典) 出雲観光協会 HP

C-2 松江南部サブエリア：古代出雲の首都に生きる人々の大地

松江の市街地周辺には丘陵や台地が点在し、それらの地域は宅地造成されていることが多い。岩質的には新第三紀中新世に堆積した砂岩、あるいは溶岩からできている（松江層）。茶白山（松江層の玄武岩溶岩）は、この地域では比較的新しい時代に噴出してできた山である。宍道湖南岸の布志名層からは中期中新世の珍しい化石（絶滅哺乳類：パレオパラドキシア）が発見された。

主要なサイト

★**茶白山**：茶白山は約1,000万年前に活動したアルカリ玄武岩よりなり、標高171mの山体を形成し、かんらん石が多く含まれているのが特徴である。意宇平野は、意宇川によって形成された海岸平野で、平野の西から下流に向かって、扇状地、旧河道が発達する古い三角州、砂州地帯、新しい三角州、干拓地の順に整然と配列しており、平野地形のミニチュアの特徴を示す。

茶白山は『出雲国風土記』に神名樋野と呼ばれ、神聖な山であった。中世には交通の要所と見晴らしの良さから山城として活用された。周囲には島根県最大の前方向墳である「山代二子塚古墳」をはじめ、「出雲国府跡」「真名井神社」などがあり、古代出雲の中心地として栄えた地だった。



茶白山



出雲国府跡

★**花仙山のメノウ（碧玉）脈**：メノウ（碧玉）の原石は、約1,500万年前に噴出した花仙山が風化した安山岩（大森層）中に脈状に産出する。

弥生時代から平安時代まで勾玉や管玉づくりが松江市玉湯町玉造で盛んに行われていた。周囲には玉造関係の遺跡も多数発見されている。



戦前の花仙山のメノウ採掘の様子



上野1号墳玉類
島根県教育委員会蔵

★**玉造温泉**：玉造温泉の泉質はNa・Ca-硫酸塩・塩化物泉で、微アルカリ性温泉。

『出雲国風土記』の意宇郡、忌部神戸の条に、「川のほとりに温泉がある。温泉のあるところは、海にも陸にもなる。だから、男も女も老いも若きも、ある時は道につらなり、ある時は海を浜に沿って歩き、毎日集まるので市が立ち、まじりあって宴をひらく。ひとたび入湯すれば容姿がまばゆいほど美しくなり、再び入湯すれば万病がことごとく治る。いにしえから今



に至るまで、効き目がなかったことはない。だから、土地の人は神の湯と知っている」と記している。2016年11月には、全国の温泉総選挙で「うる肌部門1位」になった。

★**来待石の石切り場跡**：来待石は1,500～1,400万年前の浅海の沈降性堆積盆で形成され、安山岩の岩片を多く含む塊状凝灰質砂岩で大森層に属す。凝灰岩粒子とゼオライト（沸石）からなる石質は軟らかく、加工しやすい特徴があり、古墳時代から石材として利用されている。石切り場跡に「モニュメント・ミュージアム来待ストーン」がある。2016年、日本地質学会の「島根県の石」に選定された。



☆**揖夜神社**：松江市東出雲町にあり、『出雲国風土記』では「伊布夜社」、『延喜式』では「揖夜神社」に比定される。主祭神は伊邪那美命である。『古事記』、『日本書紀』では、黄泉の国で伊邪那岐命は変わり果てた妻の姿に驚き逃げ帰り、千引の岩で出口を塞いだ場所が黄泉比良坂で、揖夜神社の近くにある。伊邪那美命御陵は松江市八雲町の岩坂陵墓参考地（宮内庁）が有力とされている。



☆**熊野大社**：古来出雲国一の宮として知られる。神祖熊野大神櫛御気野命が主祭神であり、この神名は素戔嗚命の別名ともいわれている。「鑽火殿」という造りの社殿はここ独特のものであり、萱葺きの屋根に四方の壁は檜の皮で覆われ、竹でできた縁がめぐらされており、発火の神器である火鑽臼、火鑽杵が納められている。



☆**田和山遺跡**：1997年、松江市立病院建設のための発掘調査で、丘陵尾根に掘られた弥生時代前期末～中期後半の三重の環濠が見つかった。環濠内からはつぶて石や石鏃などが出土しているほか、弥生時代の遺跡では極めて珍しい硯も出土した。硯は福岡県糸島市三雲井原遺跡と同じ朝鮮半島にあった楽浪郡製である。



2-4 各サイトの関連性と申請地域のテーマ

本構想では「出雲国風土記の自然と歴史に出会う大地」をテーマに掲げており、以下のとおり大きく3つの特徴が挙げられる。

- ① 大陸の時代から大陸分裂・日本海拡大の時代を経て、日本列島の形成までの堆積や海底火山活動の過程が本構想エリア内でまとまって連続的に全て見られること

② 島根半島と中国山地との間に広がる宍道地溝帯に発達した火山・汽水湖・平野の地形・地質が全国的にも特異的であること

③ 地質・地形が古代出雲文化や歴史と密接に関連していること

このように、ダイナミックな大地の営みと、『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』に見られる壮大な描写を体感できるジオパークである。

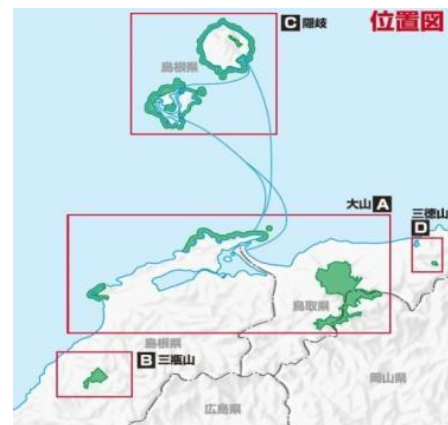
前述した地質・地形サイト、文化サイトのうち、特筆すべきものを一覽的に再掲する。

地質・地形サイト	文化サイト	サブエリア・サイト名	内容
★		大社断層の巨大な擦痕	国内最大級の鏡肌
★		唯浦の直立層	国内では珍しい中新世の地層の大規模な変形
★		小伊津海岸の洗濯岩	混濁流(乱泥流)により大陸斜面(深海)へ運ばれた陸源性堆積物が砂岩泥岩互層となって発達し、その規模は西南日本の日本海側新第三系では最大級である
★		瀬崎の崩落火道・加賀の潜戸	海底火山の形成過程に関する国際的な研究が数多くなされている
★		瀬崎のドンド穴	海食洞と柱状の窪地がセットになった珍しい地形
★		美保関の海食崖	国内最古級のワニ、四趾性大型哺乳類の足跡化石等
★		斐伊川	全国でもまれな砂河川
	☆	矢田の渡し	『出雲国風土記』に記載があり、日本最古の渡し船
	☆	田和山遺跡	弥生時代の遺跡では珍しい楽浪郡伝来の硯が出土
★		宍道湖・中海	日本最大の連結汽水湖
★		大根島の溶岩トンネル	日本で2つしかない国指定特別天然記念物に指定された洞窟、世界的に珍しい生物が生息
★		立久恵峡	河川侵食による火山角礫岩層の150mに及ぶ垂直崖固有種であるオオメノマンネングサ、オッタチカンギク、絶滅危惧種であるイワギリソウなどが生育
	☆	荒神谷遺跡	これまでの国内の銅剣出土総数約300本を1か所で上回る358本や銅矛・銅鐙を含め計380点が発掘された

第3章 地質・地形遺産の保全

(1) 制度的枠組み

本構想エリアの一部は大山隠岐国立公園だいせん お きに指定されており、自然公園法によって保護が規定されている。また、「ラムサール条約」(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)の登録湿地である中海しんじこ・宍道湖は、条約の理念に基づき湿地の保全再生と賢明な利用のための取り組みを進めている。



大山隠岐国立公園 エリアマップ
出典)一般社団法人 自然公園財団 HP

(2) 仕組みの構築に向けて

ユネスコ世界ジオパークの自己採点基準によると、地学的自然遺産の保護・保全はジオパーク活動の中で重要課題とされている。一方、本構想エリアにおいて、これまでの保全活動は個々の場所で行われているものの、体系的に実施されていない状況であった。

そのため、推進協議会では保全・教育部会を中心として、オーバーユース対策、ゴミ対策やガイド養成での意識啓発といったエリア毎に保全の基本方針を立てるなど、各地域で活動する個人、団体と情報共有及び意見交換を行い、地域を挙げた実行性の高い保全計画づくりを進めていく。

さらに、地質・地形サイトの情報を整理した地質・地形サイトカードを作成し、「保全メモ」欄を設けることで、保全状況を追記していけるよう工夫した。

(3) 活動事例〈できることから行動しよう〉

島根半島では、2009年に制定された「海岸漂着物処理推進法」に従って、漂着ゴミ対策が実施されている。一方、松江・出雲両市とも年間を通じて多くの観光客で賑わい、観光スポットの近隣には、「稲佐の浜」や「日御碕」、^{ひのみさき}「美保湾・^{だいせん}大山」を一望できる「美保の灯台公園」や、「^{かか}加賀の^{くけど}潜戸」、「^{いのめ}多古の七つ穴」、「猪目洞窟」、「赤浦海岸」など、歴史的な背景のある景勝地が点在している。県内外の関心の高い場所である一方、海岸は漂着ゴミによる景観悪化が指摘されており、行政による対応に加えて、地域においても、年1回程度の地域活動（公民館やコミュニティセンターの活動）として「海浜ゴミ回収」が実施されている。しかし、漂着ゴミは際限のない問題であり、高齢化や人口減少が進む中で、持続的に対応していくことが大きな課題になっている。

推進協議会では、まず地域を知ることが活動のエンジンと位置付け、地質・地形サイト探訪会やシンポジウムを通して、地域には誇れる自然が数多くあることを知っていただく活動を実施している。また、半島部の浦々は、元来、独立性が高い地域であるが、「海岸漂着ゴミ」への対策は共通した地域課題となる。この課題をキーワードに、ジオパーク活動と連携を図ることで、自然環境の保全、観光資源としての景観保護を推進していく。併せて、中海・^{しんじこ}宍道湖では、県境の垣根を越えて市民総出で環境保全に取り組んでおり、ジオパーク活動とも連動しながら自然環境を守り育て、次の世代にしっかりと引き継いでいく。



海岸清掃の様子



宍道湖・中海一斉清掃の様子

第4章 教育活動、研究支援活動、防災・安全対策、普及啓発等の活動

4-1 教育・研究支援

子ども向けのジオパーク活動の一環として、松江市・出雲市の小学校では、斐伊川ひいかわや島根半島を題材に、流れる水の働きや大地のつくりについて、理科の時間で野外授業を実施している。

また、松江市内の県立高校においては、校外学習の中で地質をベースにした地域の歴史・文化の発展を考え、自然環境保護や活用方法について学ぶといった取り組みを実施している。

さらに、島根大学くにびきジオパーク・プロジェクトセンターでは「ジオパーク学入門」「ジオパーク学各論」「ジオパーク学演習」等を開設して、多様で個性的な地域遺産の基礎的な知識を深め、ジオパークを活用して地域活性化を模索・支援することができる学術的な人材育成に取り組んでいる。また、文部科学省のCOC（Center of Community）事業と連携して、ジオパーク教育を積極的に展開している。

一般市民向けとしては、生涯学習の場である「まっえ市民大学」において、毎年、ジオパークを題材とした講演を行っている。これらの取り組みは定着しつつあり、今後も保全・教育部会で計画的に実施していく。

今後の取り組みとしては、大学生等がジオパークの研究に専念できる環境を整えるための「奨学金制度」を導入したいと考えている。島根大学等と緊密に連携を図りながら、全国から広く研究者を呼び込み、発表の場をつくることで、その成果を活かしたジオパークの深化、活動の活性化、すそ野拡大を推し進めていきたい。



小学生の地層学習の様子



島根大学ジオパーク学入門の授業の様子

4-2 防災

本構想エリアは地震や台風などの大規模な天災が比較的少ない地域であるものの、出雲平野しんじこ、宍道湖周辺域を中心に、斐伊川ひいかわの洪水によって水害が頻繁に起こった歴史がある。8世紀初めの古文書には「出雲に大洪水あり」と記録された文章も残っている（『斐伊川誌』旧建設省出雲河川事務所）。

1634年の洪水で斐伊川ひいかわが東流し、宍道湖しんじこに注ぐようになって以来、松江市街域での水害は増加した。本格的な治水事業は17世紀初めの築堤工事から始まったとされ、1787年に湖



平成18年の水害の様子

水を日本海に排除する佐陀川の開削や、1832年の新川開削（1839年には土砂の堆積により廃川）が挙げられる。近世に入っても洪水に悩まされてきた。その抜本的対策を図るため、^{ひいかわ} 斐伊川・^{かんだがわ} 神戸川の上流（尾原ダム・志津見ダムの建設）、中流（斐伊川放水路の建設）、下流（大橋川の改修と^{しんじ} 宍道湖・中海の湖岸堤整備）をセットにした治水対策が進んでいる。『古事記』に登場するヤマタノオロチは、毎年洪水を発生させて暴れる^{ひいかわ} 斐伊川を大蛇に見立てたものではないかとも言われ、この治水事業は「平成のオロチ退治」とも呼ばれている。

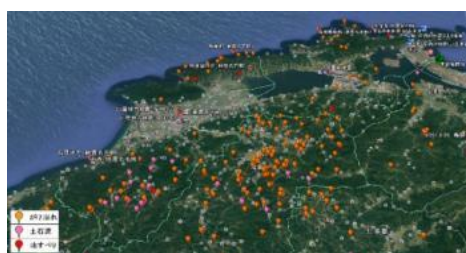


斐伊川放水路 出典)国土交通省

近年は、局地的集中豪雨（ゲリラ豪雨）等による土砂災害が問題となっているが、島根県は風化した花崗岩（真砂土）が多く、土砂災害危険箇所数は全国で2番目に多い地域となっている。

また、昭和58年5月に秋田県沖で発生した日本海中部地震（マグニチュード7.7）や、平成5年7月の北海道南西沖地震（マグニチュード7.8）で発生した津波により、島根半島を中心として家屋の浸水や船舶・港湾施設に被害を受けた。

このような地域であることから、災害時の避難方法や情報の入手方法、日頃から備えておくべきことなどを紹介した普及啓発資料を配布するとともに、災害発生の際、防災メールによる情報配信や、観光客向けには多言語対応の「縁むすびスマートナビ」で周知を図っている。加えて、島根大学自然災害軽減プロジェクトセンターでは、島根県内の地すべり、がけ崩れ及び土石流の過去の災害をGoogle Earth上で一元整理し、公開している。また、災害時に迅速かつ的確な対応を行うために、避難所情報や、土砂災害等の原因となる警戒区域などの危険情報を分かりやすく表示・提供するなど、公助・共助・自助の体制づくりを進めている。



山陰地域の自然災害データベース
(島根大学自然災害軽減プロジェクトセンター)

今後はさらに、松江市、出雲市が策定している地域防災計画の中にジオパークとの関わりを位置付け、専門分野での連携を図っていきたいと考えている。併せて、ガイドの養成時やジオツアーの際に、過去の災害とその対策も関連付けて普及啓発を行うとともに、災害の教訓を次の世代に引き継ぐなどの防災学習の推進も図っていく。

もう一つの特徴としては、本構想エリア内に島根原子力発電所が立地していることである。松江市、出雲市では、島根県や他の関係自治体とともに、原子力災害の発生もしくは発生するおそれがある場合に備え、広域避難計画を策定し、市域を超える避難措置に必要となる避難先等の確保、



原子力防災訓練の様子

また、継続的に住民参加の防災訓練や研修等を実施し、意識啓発や防災技術の習熟を図るなど、防災対策の実行性をさらに高めていく取り組みを進めている。

4-3 安全対策

平成 28 年度から地質・地形サイトの現地調査を行っており、ジオツアーで通るルート of 安全面を確認して、地質・地形サイトカードの基本情報に反映させることでエリア全体の状況把握を進めている。

調査結果を踏まえ、崩落や落石等、ツアー時に危険が伴う可能性のある地点では、案内看板等で注意を促し、必要に応じて立ち入り禁止区域を設定するなどの安全対策を講じていく。

また、安全にジオツアーが遂行できるよう、ガイドマニュアルに以下の項目を明記することで、組織全体で安全管理体制を強化していく。

【安全管理の項目】

- ・ 気象条件に応じたツアーの決行／中止の判断基準の明確化
- ・ 崩落や落石の可能性のある地点のリストアップと見える化
- ・ 遭遇する可能性のある危険生物とその対処法
- ・ ツアー時の服装、状況に応じてヘルメットなどのガイド携行品
- ・ ツアー参加者の健康状態のチェックや配慮すべき事項の確認
- ・ 万が一の場合に備えた緊急時の連絡体制（近隣の病院も含む）の構築

4-4 ガイド養成

本構想エリアでは、これまで、従来型の観光ガイドによる案内や、地質・地形的な特徴があるところでは、ジオパークの視点も加えたガイドを行ってきたが、体系的なシステムは整っていなかった。そのため、推進協議会では、ガイド養成のための講座内容やガイド派遣のシステムに関する検討を行い、それらを体系的に整備した。

平成 28 年度はガイド養成講座を全 8 回実施し、まずは観光ガイドとして活動している人々へ、地質的な要素を付け加える形でガイドができるように初級編としてレクチャーした。今後、初級編を修了したガイドは実績を増やしていくとともに、自身は更なる地質的知識を身に付ける上級編を受講することで「島根半島・宍道湖中海ジオパーク認定ジオガイド」として独り立ちする計画である。なお、外国人対応を強化するために、国際交流員※（松江市：5 か国 5 人、出雲市：3 か国 3 人）もジオガイドとしての知識を深めていくこととしている。

【H28 年度】

- 初級編の実施
- システム検討

【H29 年度～】

- 初級編の実施
- 上級編の実施
- ジオツアー受入開始

※松江市：米国、フランス、韓国、アイルランド、中国、出雲市：米国、フィンランド、ブラジル

島根半島・宍道湖中海ジオパーク認定ジオガイドは、観光客等からの依頼を受け、地質・地形サイ

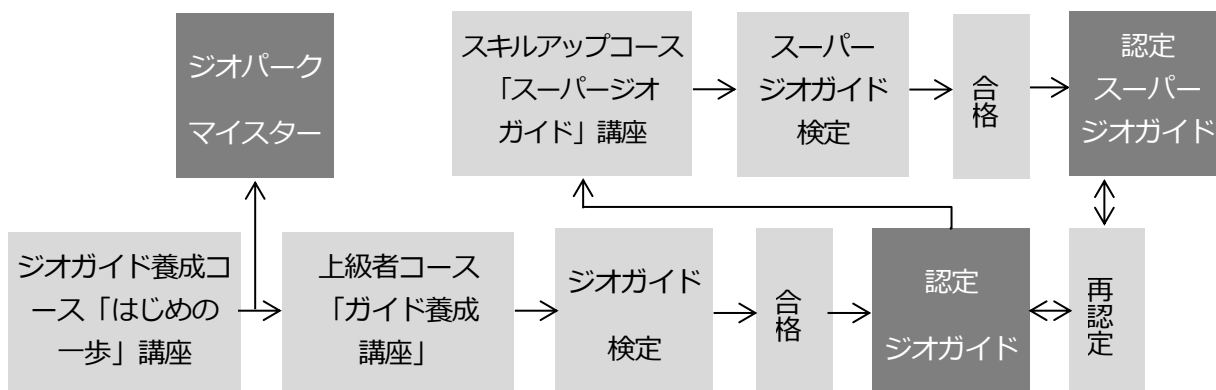
ト等を案内するが、窓口として「島根半島・宍道湖中海ジオパークガイドの会」を設立する予定である。ガイドの会と推進協議会は連携を図り、一体的にジオツアーを企画運営する。また、ガイドの会代表者は、観光・広報部会に所属し、保全・教育部会とも連携を図りながら、ガイドをする際の安全管理を徹底する。さらに、推進協議会内の学術・研究部会とも情報共有・意見交換を行い、最新の地形・地質に関する情報を得ることでガイドの質を高めていく。

■平成 28 年度ジオガイド養成講座（初級編：はじめの一步コース）の実績

回	内容	開催日	講師
1	□国引きジオパーク構想とは？	12/17(土)	島根大学大学院 総合理工学研究科 入月 俊明 教授
2	□国引きジオパーク構想 エリアの自然と保全・保護①	1/16(月)	日本野鳥の会 佐藤 仁志 理事長
3	□国引きジオパーク構想 エリアの歴史・神話・考古①	2/18(土)	山陰万葉を歩く会 川島 芙美子 会長
4	□国引きジオパーク構想 エリアの歴史・神話・考古②	2/25(土)	島根大学ミュージアム 会下 和宏 副館長
5	□大根島フィールドワーク	3/4(土)	島根県自然観察指導員 門脇 和也 氏
6	□ガイドの基本と実践・ガイド組織の作り方	3/11(土)	山陰海岸ジオパーク推進協議会 ガイド部会 木下 道則 部会長
7	□国引きジオパーク構想 エリアの自然と保全・保護②	3/17(金)	三瓶自然館 井上 雅仁 氏
8	□日御碕フィールドワーク	3/18(土)	島根大学教育学部 辻本 彰 講師



ガイド講座の様子



ガイド養成の概念図

4-5 普及活動

推進協議会の設立後、「隠岐ユネスコ世界ジオパークフェスタ」や、島根大学を中心に自治体や事業者・団体、学生との連携を図る「しまね大交流会（オールしまね COC+事業）」へのブース出展、本構想の取り組みを広く知っていただくためのシンポジウムの開催、地元プロバスケットボールチーム（島根スサノオマジック）のスポンサー試合で観戦者約2,600人にPRしたほか、市報などで本構想の意義等を掲載し、ジオパークの魅力をエリア内外に発信してきた。



スポンサー試合でのPRの様子

また、JR や一畑電車の主要駅、空港等にポスターなどを掲出し、幅広いPR に力を入れており、本年5月下旬には、全国各地から約1,500人のランナーが集まり、島根半島を縦断する「えびす・だいきく100kmマラソン」での広告掲出やグッズ配布を行うなど、今後とも継続的かつ広域的に普及活動を実施していく。

(1) 講演会・シンポジウム・見学会等の開催

推進協議会の発足以前から、島根大学では「くにびきジオパーク・プロジェクトセンター」を立上げ、「地質・地形サイト探訪会」をこれまでに14回実施した。推進協議会ではこの探訪会を継続的に進めていく方針である。

また、本年1月に開催したシンポジウムでは、本構想の目指すところ、島根半島の成り立ちや「国引き神話」の背景などの講演や、ジオパークの推進に向けた市民活動についてのパネルディスカッションを行った。これらの取り組みを通じて、ジオパークへの理解が広まりつつあり、併せて、地域別や観光業界等の研修会や学校への出前授業等、ターゲットを絞った周知にも力を入れている。



地質・地形サイト探訪会



シンポジウム

(2) 解説板の整備

地質・地形サイトに関連する観光看板や案内板は、国や島根県などによって設置されているが、それぞれの内容や規格が統一されていない。そこで、既存の法令や景観に十分配慮した上で、地域住民や観光客、ジオツアー参加者などの訪問者にとって認識しやすく、特にジオパークを移動しながらそ

の地質学的背景と神話のつながりを学べるよう、統一性とストーリー性を考慮して整備を進めていく。併せて、写真や図を多用しつつ、地形や地質、植生などの記述を充実し、神話や歴史、文化についての解説も加える。

看板設置方針

設置レベル	内容	設置場所
総合	島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想の全容がわかる。	空港、JR・一畑電車の主要駅
エリア	エリアのストーリーやエリア内にあるサイトのことがわかる。	エリア内の主要な集客施設（観光案内所、駅、支所など）
サブエリア	サブエリアのストーリーやエリア内にあるサイトのことがわかる。	サブエリア内の主要なサイト周辺の公共施設・公民館・コミセン
サイト	施設周辺のサイトのことがわかる。	サイト

さらに、スマートフォン等で読み込める QR コードを付加することでより詳細な WEB サイトへ誘導し、来訪者への丁寧な情報提供を行うとともに、訪問者数等を把握するデータとしても活用していく。また、これらの整備については、国、県と一体となって進めている^{だいせん お き}大山隠岐国立公園のナショナルパーク化の取り組みと緊密に連携して推進していく。

(3) ロゴマーク作成、普及グッズの作成・配布

活動のスタート段階から住民参加型の本構想とするため、普及啓発のシンボルとなるロゴマークを広く募集した。採用されたロゴマークは、島根半島を古代（風土記時代）の姿にすることで、地殻の大変動を経てきた半島の成り立ちを意識させる。そして、古代人を用いて人々の営みや歴史、出雲文化の形成をイメージさせるものである。これをポスター、パンフレット、地質・地形サイト看板等に表示するとともに普及啓発のグッズとして幅広く活用していく。

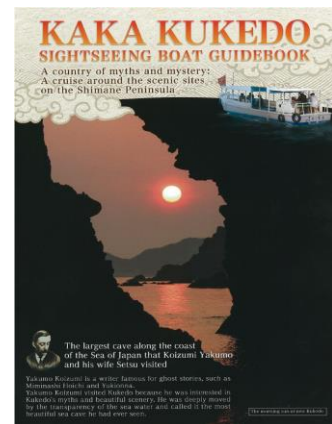


推進協議会
ユニホーム

(4) ガイドマップ・パンフレット

本構想の魅力や各地質・地形サイトを紹介するとともに、「国引き神話」や各地に根付いた信仰、食文化などの風土と大地の形成との繋がりを紹介し、訪れて楽しいと実感してもらえるガイドマップを作成した。併せて、環境教育等の学習にも使えるよう、小学校高学年程度が読んで理解できる内容でのガイドブック作成も計画している。

また、地域内の観光地には多言語化されたガイドマップやパンフレット等があり、ジオパークに関連する記述も多く見受けられる。これら既存のパンフレット等と連携・情報共有を進め、より多くの人々に手に取ってもらうことで、ジオパーク活動への理解を促進していく。



加賀の潜戸
英語版 ガイドブック



ガイドマップ

(5) その他の普及活動

観光事業者や交通事業者、マスメディア等で構成される観光・広報部会を推進協議会内に設置し、広報活動を行っている。具体的には、新聞やJR車内誌、松江市報、中国電力(株)の社内報等に掲載されている他、テレビでも取り上げられている。また、本構想のホームページ及びFacebookページ、くにびきジオパーク・プロジェクトセンターのホームページを開設し、活動状況を広く発信している。山陰中央新報での連載は、30回を超え、2017年4月から、島根日日新聞で本構想の活動状況に関する連載を開始した。

※島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想HP：<http://www.kunibiki-geopark.jp/>

【協議会メンバーの活動状況】



中国電力(株)社内報

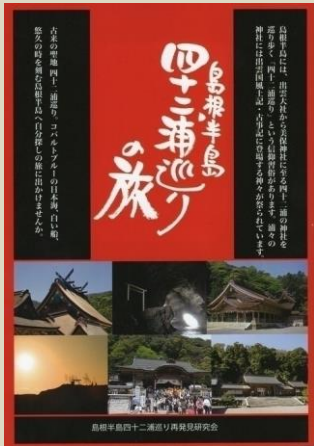


グッとくる山陰 2016 夏
出典)JR山陰いいもの探果隊 HP



山陰中央新報での連載

【協議会メンバーの活動状況】

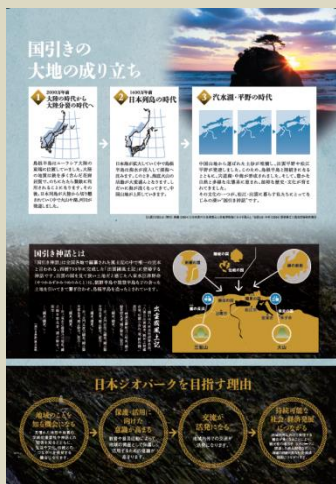


島根半島四十二浦巡り再発見研究会冊子・機関誌



島根県地学会冊子

【協議会の広報媒体】



チラシ広告



のぼり旗



電車広告



季刊誌



クリアファイル

第5章 地域の持続可能な発展

5-1 地域経済活動

(1) 本構想エリアを取り巻く動き

本構想エリアにおいては、観光分野で新たな動きが始まっている。1つ目は、JR西日本が2017年6月17日に運行開始する新たな寝台列車「TWILIGHT EXPRESS 瑞風」である。全5コースの運行ルートのうち、山陰本線を周遊する3コースが決定している。立ち寄る観光地は今後ブラッシュアップされる予定もあることから、魅力的な地質・地形サイトを巡るコース導入に向け、推進協議会の構成メンバーでもあるJR西日本と連携を深めていく。2つ目は、県外の民間事業者と検討を進めている「水陸両用飛行機」の導入であり、平成29年度中の就航が実現すれば、中海を起点として本構想エリアを上空から堪能できる。さらに、日本海側の中継拠点化が図られることで、「山陰海岸ジオパーク」や「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」をはじめ、より広域的な連携強化のツールとなり得る可能性を秘めている。

また、松江市に隣接する境港市では、大型クルーズ客船の寄港が増加傾向にある。2014年は14,110人、2015年は19,429人、2016年は39,589人と、年々増加傾向にあり、これらの観光客をジオツアーに誘客する手法を検討していく。併せて、大山だいせんおき隠岐国立公園のナショナルパーク化の取り組みとも連動し、一体的に相互の強みを生かした活動を推進していく。

明治時代に松江に英語教師として滞在した小泉八雲こいずみやくも（ラフカディオ・ハーン）が、松江・出雲に色濃く残る『古事記』や『出雲国風土記』の原風景を『知られぬ日本の面影』と題して出版、世界のベストセラーとなったことはよく知られている。国際的な著名人が辿った足跡には、本構想エリアを代表する地質・地形サイトが含まれており、インバウンドに対応したツアー商品や、小泉八雲ゆかりの紀行ツアー、併せて、美保関みほのせきのあご（飛び魚）すくいなどの



TWILIGHT EXPRESS 瑞風



水陸両用飛行機



水陸両用飛行機からの眺め



あごすくい

出典)美保関地域観光振興協議会 HP

体験型メニューの商品開発を進めていく。また、この著書は単なる紀行ではなくこいずみやくも小泉八雲の寛容な「Open Mind (開かれた精神)」が息づいており、国造り・国譲りといった「出雲神話」も絡めて平和志向を発信していきたい。

(2) 長期滞在をうながす仕組みづくり

近年、旅行のスタイルが団体型から個人型に変わってきており、また、外国人旅行者は良いもの（本物）があるところには長く滞在する傾向がある。

単に見るだけの観光や通過点ではなく、個人ニーズへの対応、拠点施設の充実、サイクリングやウォーキングと一畑電車（自転車をそのまま持ち込める電車）、バス、JR などの移動手段を活用し、安心して楽しんでいただける環境を官民挙げて構築していく。

そして、ジオパークと神話ストーリーを学びつつ、本構想エリアを楽しんでもらう仕組みを創り上げることで着地型観光をさらに推し進めていく。その際、良質な宿とサービスを提供することが課題の一つであるが、全国的な問題でもある空き家対策と併せて、古民家や集会所などを改修して提供することが有効と考えている。加えて、長期間滞在しても飽きさせないメニューを多数準備していく必要があるが、地質・地形サイトの多くは沿岸部に所在することから、定置網体験、ダイビング、シーカヤックなど、沿岸部特有の体験型観光の充実を図る。

また、出雲市には酒の神であるくすのかみ久斯神（くすなひこのかみ少彦名神）を祀る「佐香神社」があり、さかどぶろく祭りが有名である。こうした当地のお酒と伝統料理を提供するなど、地質・地形サイト、観光地、食事処、宿泊施設といった様々な地域資源と民間活力をフル活用し、それらを堪能できるルートや仕組みをつくることで、地元産業が持続的に活性化する好循環を創り上げていく。

本構想エリア内をより快適に周遊してもらうための工夫としては、様々な場所で SNS を活用し、仲間を集めて便利にタクシーが利用できることや、タクシー会社を対象にジオパークの魅力を伝えるための人材育成などがポイントとなる（観光タクシー研究会、松江ツーリズム研究会等の活用）。また、地質・地形サイト間の新たな移動手段として、しんじこ宍道湖・大橋川～中海を結ぶ観光船の活用を、地元の女性で結成された神社ガールズ研究会（社☆ガール）が試験運行して注目されており、連携して実現を目指したいと考えている。

そして、誘客拡大のためには、情報発信の方法も重要な視点となる。実際の活動として、女子大生とのコラボで女子旅をテーマに誘客を伸ばしたり、出雲商工会議所「薬草×美活PJ」では、薬草女子



自転車をそのまま持ち込める
一畑電車
出典)しまね観光ナビ



社☆ガールの活動の様子

部を立上げアカメガシワ入りクッキーを開発し、首都圏のナチュラルローソンで販売されているほか、デトックス&リフレッシュ旅のモニターツアーを実施した。

このような女性ならではの発想を生かし、商品開発と情報発信を通じて女性雑誌等に売り込んでいく。観光情報の発信に加えて、ジオパークの魅力を鉄道車両やバスでの車内広告、案内放送、広告ラッピングなどで分かりやすく伝え、新たな観光客層を掘り起こしていきたい。



葉草女子部モニターツアーの様子

(3) 地域が継続的に稼げる枠組みの構築

国内外からの観光客の拡大に対応するため、地元特産品の購入・発送等がクレジット決済やスマホで決済可能な手段導入を検討する。神社等を含む地質・地形サイトでは QR コードで地質・地形サイト風景を組み込んだ電子朱印状などを購入できるソフトを地元企業と開発していく。地質・地形サイトの玉造温泉では「願い石、叶い石」などが大ヒットし、その収益を活用して保全活動を行っている。このような成功事例をヒントに、ジオパークによる経済活性化のアイデア展開を図っていく。



電子決済のイメージ
出典) Saïd Business School HP

5-2 ジオツーリズムの可能性

(1) 実績、課題

平成 26～28 年度に実施したジオツアー（探訪会）は計 15 回、411 名の参加者であった。島根大学の研究成果を中心としたツアーであり、学術的要素がふんだんに紹介されたことから、地質に興味を持つ参加者が多く集まったと考えている。今後は、より多くの一般観光客を取り込むため、地形・地質的な要素に加えて、文化的要素を織り交ぜたツアーを企画していく。一方で、特徴的な地層や地形を有する場所は沿岸部に多く見られ、船で行かないと見るできない。また、大型バスで近くまで辿り着けない場所もあるなど

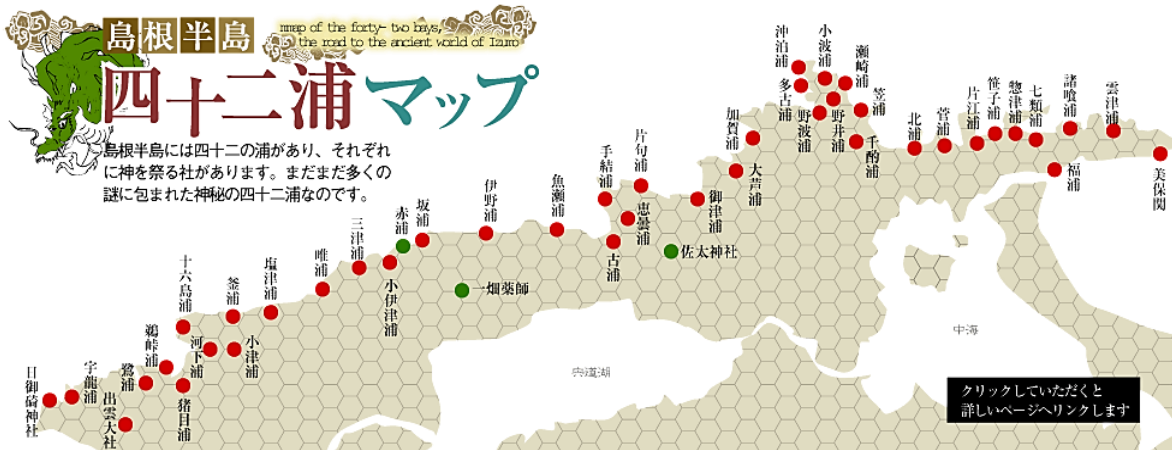


出典)(一社)加賀潜戸遊覧船

の課題が残った。陸路からアクセスできない地質・地形サイトに対しては、既存の観光船等（日御碕の観光船、加賀の潜戸観光船、美保関の観光船、中海の遊覧船など）との連携を図り、地質・地形

サイト近辺を遊覧するコースや、船で移動する新規ツアー等も検討していく。

また、島根半島には、古くから汐汲みをしながら浦々の神社をめぐる「四十二浦巡り」という信仰習俗があったが、現在、その慣習が途絶えている。2010年に、島根半島四十二浦巡り再発見研究会が発足し、四十二浦巡りの古来の意味や意義を研究しており、その一環として、島根半島の浦々に伝わる歴史や文化、神事、郷土食などの再発見等も行っている。併せて、これらを体験できるバスツアーを定期的に開催し、人気を博している。このような活動と連携を図ることで、ジオツアーの魅力を高めていく。



四十二浦マップ 出典)島根半島四十二浦巡り再発見研究会 HP

(2) 基本的な考え方、方針、展望

本構想では、島根半島を中心とする地質・地形と、国引き神話や古代出雲の歴史文化を融合させたジオツアーを基本として考えている。国宝出雲大社には年間600万人の観光客が訪れるが、「点」の観光となっていることから、外国人観光客の宿泊人数は全国46位と低く日本人観光客の滞在日数も短い。従って従来型ではない本構想のストーリー性を生かした長期滞在型、体験型観光を実現させる仕組みの構築が重要である。

【新たな試み】

美保関から出雲大社まで道路は整備されており、アップダウンはあるが交通量は少なく風光明媚でサイクリングに適している。

そこで、大手自転車メーカーの販売店ジャイアント松江等と連携し、レンタル自転車の提供や、自転車持ち込み可能な一畑電車と提携する。さらに、松江しんじ湖温泉や出雲市駅前のホテル等と連携して自転車持ち込み可能かつ簡単な修理工具等を完備した宿を提供する。市街地から離れた四十二浦コース等では浦々に30程度ある郵



出典)NPO 法人サイクリストビュー

便局に簡単な修理工具等を配備するとともに、ジオパーク情報の提供や地元特産品の注文受付配送システムを構築し、同時にスマホ決済可能な仕組みの導入も検討する。

【モデルコース】

① 島根半島一周サイクリングツアーコース

1日目 能登の珠洲三崎から曳いたとされる「美保関」を巡るツアー

松江から矢田の渡しの船に乗って大橋川を渡り、中海に浮かぶ「大根島」へ。ジオガイドと「溶岩トンネル」探検、その後「由志園」を見てから、能登の珠洲三崎から曳いてきたとされる「美保関」へ。「美保神社」参拝後、地蔵崎の古浦層の青石の門塀に囲まれた灯台から「沖の御前」を見て灯台カフェにて昼食、5～7月にはあご（飛び魚）すくいに挑戦可能。七類港経由して、瀬崎周辺の「瀬崎のドンド穴」や「ヒョウタン池」、「瀬崎の崩落火道」など地質・地形サイトを巡って加賀へ。加賀港から千数百万年前に火山活動でできた名勝「多古の七つ穴」「加賀の潜戸」を観光船で遊覧、乗船場にあるビジターセンター（マリンプラザしまね）で本構想の全体像を学んでから、「多古の折絶^{おりたえ}」近くにあるユネスコ無形文化遺産佐陀神能の「佐太神社」を参拝、松江しんじ湖温泉に宿泊し、ジオパークの幸を堪能。



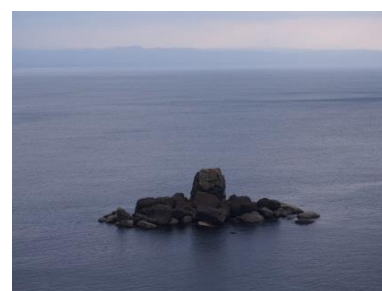
ヒョウタン池



ユネスコ無形文化遺産に登録されている佐陀神能

2日目 新羅の三崎から曳いたと記された杵築御埼を巡るツアー

松江から一畑電鉄で自転車と共に乗車して出雲大社前駅へ。大国主神^{おおくにぬしのかみ}を祀る国宝「出雲大社」参拝後、「大社断層の巨大な擦痕」や「礫島^{つぶて}」を見ながら、美しい柱状節理の上に立つ東洋一の高さを誇る「日御碕灯台（世界の歴史的灯台百選）」へ。美保関町森山産の凝灰質砂岩を用いた白亜の灯台展望台からウミネコ繁殖地で天然記念物の「経島^{ふみしま}」見学して、天照大神と素戔嗚命^{あまてらすおおかみ}を祀る「日御碕神社」を参拝し、日御碕のビジターセンター「日御碕観光案内所」でガイドによるジオツアーに参加。鵜鷺地区^{うさぎ}「カフェうさぎ」で昼食。黄泉の国入り口「猪目洞窟」、古代海運の港で『出雲国風土記』記載の岩海苔名産地の「十六島^{うつぶるい}」、開山 1400 年の古刹「鰐淵寺^{がくえんじ}」、鉄文化を伝え



礫島



日御碕灯台

すさのおのみこと からかま
た素戔嗚命を祀る「韓竈神社」、銅山等のあった唐川から古代遺跡の眠る「去豆の折絶」を通
って平田へ。「小伊津海岸の洗濯岩」を見て、創建 1100 年の古刹「一畑寺」へ参拝。宍道湖岸
の宍道湖自然館「ゴビウス」を見学して、「斐伊川」を渡り、日本最多の銅剣が出土した斐川
の「荒神谷遺跡」と「荒神谷博物館」を訪れてから、八上比売由来の美人の湯「湯の川温泉」
で宿泊。

3日目 勾玉造りの「玉造温泉」、素戔嗚命ゆかりの神社巡りツアー

「湯の川温泉」から、「女夫岩」、古代からの来待石採石場跡にある「モニュメント・ミュージ
アム来待ストーン」「花仙山」の瑪瑙で勾玉、管玉工場のあった「玉作湯神社（願い石）」、『出
雲国風土記』で出雲国第一の歌垣の場の「玉造温泉」、
温泉につかった後、昼食へ。素戔嗚命を祀る出雲国一宮
の「熊野大社」や「八重垣神社」、国宝「神魂神社」、茶
臼山（神奈樋野）のふもとにある「八雲立つ風土記の丘
（古墳群と資料館）」を巡って、伊弉冉尊を祀る「揖夜神
社」、伊邪那岐命が黄泉の国から逃げ戻って出口を岩で
塞いだ「黄泉比良坂」を見学し帰途へ。



女夫岩遺跡



島根半島1週サイクリングコース

② 小泉八雲の『知られぬ日本の面影』を活用したドライブツアーコース

1 日目 小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）息吹を感じる 1 日

「小泉八雲記念館」、「小泉八雲旧居（ヘルン旧居）」の庭→国宝「松江城」内の「城山稲荷神社」参拝→「天守閣」→そして怪談の舞台の「月照寺」（松平家菩提寺）、「清光院」、「普門院」（日没後、ゴーストツアーあり）そして美保関へ。
美保関の「青石畳」のハーン通りから、独特の美保造の社殿を持つ「美保神社」参拝→古浦層の岩石で作られた塀で囲まれた「美保関灯台」周辺を散策し、灯台カフェから「沖の御前（えびすさまが鯛釣りをした場所）」を見ながら海鮮昼食。4 月は「青柴垣神事」、12 月は勇壮な「諸手船神事」を港に面した旅館から見学し、宿泊。夏期には「あごすくい体験」と、日本海の鮮魚に舌鼓。



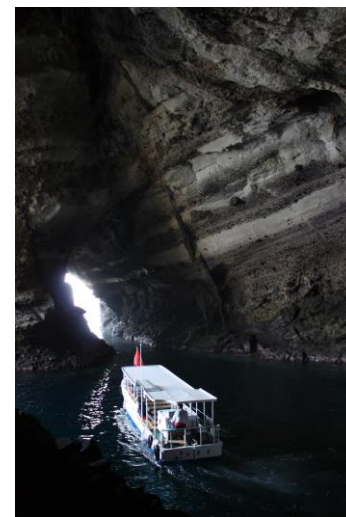
小泉八雲旧居



美保関灯台とその周辺

2 日目 島根半島のリアス式海岸の景観美と四十二浦巡りの 1 日

美保関→七類（隠岐の玄関口）→「千酌海岸の波食棚」（四十二浦の 1 つ）→加賀。ビジターセンターの「マリンプラザしまね」で本構想の全体像を学ぶ。そして、遊覧船で「加賀の潜戸」→「多古の七つ穴」等のジオの迫力を体感する（4～10 月）。昼食後は、日本海沿いに島根原子力発電所を見下ろし→風力発電基地を見上げながら浦々を巡って「十六島」→「猪目洞窟」→



潜戸遊覧船

うさぎ 鵜鷺 經由で日御碕へ。ビジターセンター「日御碕観光案内所」でジオガイドと「日御碕灯台」→「柱状節理」を見学、新羅三崎から曳いてきた「支豆支の御埼」の話聞いて「国引き神話」を実感。
「日沉宮」とも言われる「日御碕神社」参拝→国譲り談判の伝承を持つ「礪島」→国内最大級の「大社断層の巨大な擦痕」などの地質・地形サイトを見学しながら出雲市大社町に入り、門前町に宿泊。

3 日目 出雲平野の成り立ちと古代出雲の歴史・文化を感じる 1 日

早朝の「稲佐の浜」散策→奉納山から「菌の長浜」眺望→ジオガイドと共に「出雲大社」正式参拝→「北島国造家の社」参拝。古代の趣を伝える社を体感した後、ガイドと共に「古代出雲歴史博物館」で出雲の歴史の再確認。昼食は、老舗の「出雲そば」を堪能→「斐伊川」→「出雲平野」。最後は、古代出雲国が実在した可能性を示唆する国内最多の弥生時代の銅剣 358 本と銅



出雲そば

鐸 6 個、銅矛 16 本が出土した「荒神谷遺跡」と隣接する「荒神谷博物館」で、その詳細を学び、本構想の奥深さを知って帰路に就く。



小泉八雲の「知られぬ日本の面影」を活用したドライブツアーコース

5-3 地域住民の活動

ジオパーク活動を通じて、自然やふるさとの価値を再発見し、見つめ直すことが、保護・保全活動を進める第一歩であり、そのことは地域の宝を大切に守り育てながら、活用していくことにつながる。

実際、自然のすばらしさを学ぶことで、これまでは、やらされ感であった海岸清掃が、自発的に取り組む姿勢に変わり、また、海底湧水や海藻といった海をキーワードに、その特性を産業振興に活かすことで、地域の稼ぐ力を引き出そうという動きが始まっている。

観光面でも、自然を満喫できる環境を維持していくことは、全国から人々が集まる「えびす・だいこく 100 km マラソン」、「出雲全日本大学選抜駅伝競走（出雲駅伝）」、「まつえレディースハーフマラソン」、「くにびきマラソン」、「一畑薬師マラソン大会」、「松江しんじ湖温泉グルメリレーマ



えびす・だいこく 100km マラソン



えびすだいこく 100km マラソンは「国引きジオパーク構想」を応援しています！

えびす・だいこく 100km マラソン
Tシャツデザイン(案)

ラソン」、「なかうみマラソン全国大会」、「出雲路センチュリーライド」、「中海ライド」などのスポーツイベントの付加価値を高め、交流人口の拡大につながるものと考えている。

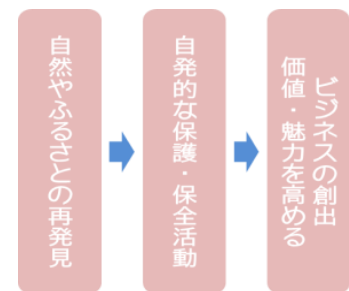
併せて、ラムサール条約登録湿地の中海・宍道湖^{しんじこ}で市民を挙げて実施している「宍道湖・中海一斉清掃」、地元財団による鳥類・昆虫類、植物研究やビオトープの整備等の各種保全活動との連携も深めていく。

今後さらに、多様な主体と一体となり「自然やふるさとの再発見」⇒「自発的な保護・保全活動」⇒「価値・魅力を高めるビジネスの創出」という好循環に向けて具体的な取り組み内容を戦略的に描いていく。

これらのジオパーク活動の基盤は、地域住民が主体となった持続的な取り組みであり、学ぶ、守る、活用するといった活動への支援を積極的に行っていく考えである。

また、保全活動でも、幅広い年齢の方々が参加する海のクリーン作戦や海の学校など、ジオパーク活動を通して自然への愛着を育むとともに、地域資源を生かした産業活性化の動きにつなげていく。

安心安全の観点からも、地域の自然や歴史を良く知ることが重要であり、その上で、日頃から災害時の心構えや訓練、高齢者等の見守りなど、減災意識や災害対応力を高め、自然との共生を共通理念に地域を挙げて活動を展開していく。



海の学校の様子

第6章 日本ジオパークに立候補する背景と理由

本構想エリアは、北側に島根半島という天然の巨大な防壁があるため風雪や日本海の荒波を防ぎ、出雲平野・松江平野といった豊かな大地、広大な汽水湖が形成された。この肥沃な大地の恵みにより豊かな文化が育ったと言うことが『出雲国風土記』に記されており、地層・岩石・火山といった地質学的に貴重な場所と歴史・文化が有機的に結び付き、ユニークかつ見どころの多い魅力的な地域となっている。

ジオパークの取り組みを通じて、その価値を再認識し、守り育てながら、未来を切り拓いていく新しいモデルを創出したいと考えている。

【出雲国風土記から「平成の出雲国風土記」へ】

ジオパーク活動は、地質地形、生態系、生活文化などの地域情報を調査・研究し、その保全とともに活用していくものである。まさに、地方の文化風土や地勢等を書き綴る取り組みは、奈良時代に編纂された風土記にも対比できる。

『出雲国風土記』は、全国で唯一ほぼ完全な形で今日に伝わっており、「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」だからこそ「平成の出雲国風土記」という新たな物語として国内外に広く発信することができる。そして、その取り組みを通じて、今を生きる私たちは、これら貴重な財産を後世へと引き継ぐ責務があると考えている。



『出雲国風土記』(日御碕神社本)
日御碕神社所蔵、島根県立古代
出雲歴史博物館写真提供

【地方創生の原動力】

大地の成り立ちや育まれてきた歴史文化を深く学び、見つめ直すことは、ふるさとへの誇りと愛着を高め、交流人口の増加を図ることはもちろん、次代を担う人材育成や若者定住に資するものと考えている。さらには、未来の国造りに挑戦できる若者を育てていくことにもつながるものである。

このように、ジオパーク活動は、全国の地方自治体が進めている地方創生の目的とも合致しており、特に、人口急減、超高齢化社会を迎える中で、自然環境・景観や祭り・伝統産業の継承、真の郷土愛の醸成につながる「地方創生の原動力」とも言える取り組みである。

【ジオパークを核にした交流で未来を切り拓く】

本構想エリアには、^{だいせん お き}大山隠岐国立公園、ラムサール条約登録湿地の^{しんじこ}中海・宍道湖、名勝・天然記念物の「^{か か く け ど}立久恵峡」や「^{か も す}加賀の潜戸」、国宝に指定されている「出雲大社」、「松江城」、「神魂神社」をはじめ、様々な地域資源がある。しかしながら、制度・分野や指定エリアの違いから一体的な戦略が描きにくい状況であった。

これらの「宝を結び付け、価値を高め、丸ごと語る」ことができるのは、ジオパークの取り組みだけである。地域経済の柱である観光産業を活性化し、魅力的な雇用の場を創出するとともに、自信を持ってふるさとの魅力を語り、地域を支える人づくりを行うことで、「持続可能な循環型社会」を構築していく。

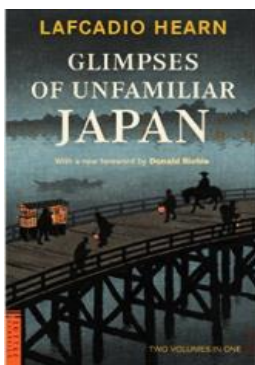
また、ジオパークだからこそ「歴史的な視点・未来からの視点」を持った活動が可能であり、さらには、理念を共有する全国のジオパークとの連携により、広域的な視点で活動を展開することができるものと考えている。

特に、本構想エリアと隣接する「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」とは、相互に語り継がれる「国引き神話」や近接する距離的なメリットを生かした交流を行うことができると考えられる。また、地質

的な成り立ちに共通点が見られる「山陰海岸ジオパーク」との交流を緊密にすることで、ジオパーク活動を推進しつつ、相互の地域経済発展に資する新たなツアー商品等が開発できると考えている。また、『古事記』では、^{おおくにぬしのかみ}大国主神が^{ひすい}翡翠を求めて北陸を訪れ、^{ぬなかわひめ}沼河比売をお妃にしたという伝承が残る。「糸魚川ユネスコ世界ジオパーク」などとインパクトのある機会の創出などにもチャレンジしていきたい。さらに、子どもを対象としたジオキャンプやジオパーク専門員の交換留学などについても検討していき、ジオパーク間の連携を深めながら、地質・地形と神話の融合といった本構想エリアの特徴に磨きを掛け、相乗効果を生み出していきたい。

【日本ジオパークネットワークへの貢献】

本構想エリアは、神話の地、縁結びの地として、年間延べ 2,000 万人を超える観光入込客がある。これらの歴史ファンや女性客などへ、歴史文化の形成に大地の成り立ちが深く関わっていることを伝えていくことで、ジオパークの価値、そして、地球環境の大切さを広く知っていただく役割を果たしていく。



小泉八雲著『知られぬ日本の面影』英語原本

明治の文豪^{こいずみやくも}小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、「出雲国には風土記の時代の日本の原風景が残っている」と語っている。島根半島・宍道湖中海ジオパークらしさを発揮し、エリアやジャンルを超えた交流を深化させるとともに、地域と一体となった活動を通じて、ジオパーク大好き人間の輪を広げていきたいと考えている。

このことは、奇跡とも言える地球環境、そして脈々と受け継がれてきた歴史文化を守り育て、未来へとバトンを繋ぐことであり、世界ジオパーク・日本ジオパークへの貢献にもつながるものと確信している。